

特別号

成壽

SEI JU 1991



横浜 善光寺

特別号

成壽

SEI JU 1991



発刊のことば

善光寺海外留学僧派遣育英会は発足して七年を経し、派遣留学僧の数は一十四名に達し、派遣先はイングランド・スリランカ・タイ・韓国・アメリカ・イギリス・フランス・ヨーロッパをして韓国及び中国より日本留学と九カ国に及んでいる。

今回、譜文集第一集を刊行したが、これは留学僧の応募譜文である。これとは別に、留学先より、また留学修了後事務局に寄せられたレポートはその都度善光寺機関誌『成寿』に掲載発表しておこなうが、このたび第六回派遣の森 祖道師（愛知学院大学教授）よりスリランカ国立ケンブリヤ大学ペーパー「学仏教学大学院における二ヶ国にわたる客員教授としての公務報告書」、第二回派遣の島崎義孝師（花園大学講師）よりはアメ

つかの禅仏教、同じくNICOZの活動と展開についての覚え書き、第六回派遣の三師徒穂師よりバハバハハイシコ仏教として第六回、第七回と継続派遣の沖田玉映師（在米）よりはタカヒロ禅マツノア・センターでの日々の体験記が寄せられた。四篇を合わせると相当膨大になるので『成秉』の別冊として上梓せねばならぬとした次第である。

スコットンカとアメつかの仏教、特に禅仏教のあるがままのあがたを肌で感じ取つた貴重な資料なのでぜひ一読を乞ふ、禅の国際化に活眼を開いていただければ望外のよろいびである。

平成二年十一月

鷲光寺海外留学僧派遣奨英会 理事長 黒田 徹志

● 四 次 ●

- 客員教授公務報告書 森 祖道
アメリカ禪仏教のこと覚え書IV——ZCNYの活動と展望—— 島崎 義孝
バングラディシュ仏教 三宮 瞳穂
TASSAJARA ZEN MOUNTAIN CENTER 冬安居 沖田 玉映

平成二年七月一九月
スリランカ国立ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院

客員教授公務報告書

森 祖道

(第六回派遣留学僧
愛知学院大学教授)

目 次

- 一 序 言
- 二 ケラニヤ大学当該大学院の概要と特色
- 三 正規の講義
- 四 公開講義
- 五 博士論文の審査
- 六 結語——今後の課題——

一 序 言

平成二年七月末より約一ヶ月の間、私(当時、城西大学教授・東大講師)はスリランカ国立ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院に日本仏教講座担当の客員教授(Visiting Professor of Japanese Buddhism, Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies, National University of Kelaniya, Sri Lanka)⁽¹⁾として招聘され、主としてコロンボ市内に滞在した。ただし

「招聘」といっても、経済的に豊かな先進国の場合と違つて、発展途上国の場合は、先方が旅費・滞在費など経費一切を負担するという例は少なく（もし負担したとしても、それは彼等の基準による非常に少額なものであつて、それだけでは不足である）、出講者の側の負担となる。これは、日本の様に「経済大国」と見られるいる国の一、発展途上国に対する文化的援助の一環と理解しなければならないことであろう。現にわが国の政府は、毎年、何千億円という巨額の対外援助を多くの途上国に与えているわけであつて、各国の事情に応じて、実に多様な経済的・社会的・文化的対外援助協力が継続的に実施されつゝある。従つて私の出講の場合も、右の様な对外援助協力の一事例と解さなくては、世界を相手にする日本の国際活動は成り立たないであらう。



筆者に用意された客員教授室入口

に、善光寺海外留学僧派遣育英会に経済的援助を申請したところ、幸いにも、本育英会黒田武志理事長をはじめ、関係者各位のご理解を賜わり、早速、第六回派遣留学僧に採用していただいた。この段、先ずもつて黒田理事長並びに関係者各位に深く感謝する次第である。また本育英会に私をご推举下さった、恩師中村 元先生（本育英会顧問・東大名誉教授）、並びに実際に仲介の労をとつて下さった畏友阿部慈園氏（本育英会参与・明治大学専任講師）にも厚く御礼申し上げる。⁽²⁾

ところで今回、客員教授として要請された公的な業務やそれに対する抱負などについては、応募の当初、本育英会に提出した拙論「禪の国際化と私の役割——客員教授としてスリランカ仏教徒に対する啓蒙——」に既に詳しく述べた。そしてその内容は殆んどそのまま、『成寿』誌第十五号（一九九〇年 秋季号）に掲載されたわ

けである。しかしながら、実際に現地に出向いてみると、当初、文書などで連絡を取り合意していた公務の内容や予定には或る程度の変更があつた。当大学院としては、海外より初めて招く客員教授でもあり、また滞在期間も比較的短期間であつたことなども原因して、最初より確定的な予定計画を立てることは困難なことであつたと推察する。とにかく、国情の全く異なる海外の大学、特に発展途上国の大学においては、何事も臨機応変、相手の要望に可能な限り即応して、相手の側の役に立つ様に努力することが肝要と判断して、私は、日本で準備して来た講義の一部を変更したり、最初は全く念頭になかつた緊急の用件を受けたりするなど、出来るだけ柔軟に対応して、先方側に満足してもらう様に努めた。以下において報告する私の公務の内容が、右に触れた最初の予定計画と、一部相違しているのはすべて右に述べた事情によるも

のである。この一点を最初にお断りして、以下順次、実際に現地において行なつた様々な教育研究上の公務内容を報告する次第である。

二 当該大学院の概要と特色

実際の具体的な公務報告に入る前に、その前提として、私が招聘されたケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院の概要とその特色について述べる。このことは私の公務をより良く理解していただくためにも必要なことと考へるからである。

ケラニヤ大学は、その前身をウイディイヤーランカーラ仏教学院 (Vidyalankara Pirivena) と言つた。これは比丘の教育を専門とする学院であつたが、それが一九五九年に国立大学に昇格し、Vidyalankara University となつた。その後、一九七一年にはセイロン大学ウイディヤーランカーラ校舎 (University of Ceylon,



大学院の正面玄関

Vidyalankara Campus) と改称され、東洋学部・文学部系の大学となつた。そして更に、一九七八年には現在の名称たる University of Kelaniya となり、仏教学を含む人文科学系の学問を中心とする総合大学へと発展し、今日に至つては、⁽³⁾ 大学のメインキャンパスは、コロンボ市郊外のケラニヤに所在するが、パーリ学仏教学大学院だけは、ここを離れてコロンボ市内に独立した校舎を有する。

当大学院(直訳すれば「研究所」)は、最初、ウイデイヤーランカーラ仏教学研究所(Vidyalankara Institute of Buddhist Studies) という名で、一九七五年にケラニヤ大学の一機関として設立されたが、一九八〇年より改組されて現在の名称となつた。現在、当大学院には仏教哲学研究・仏教文化研究・仏教文献研究という三つの専攻コースがあり、それぞれに次の四つの課程が設けられている。⁽⁴⁾

- (1) 専修課程 (Diploma Course 一年間の講義)
(2) (文学) 修士課程 (Master of Arts Course 一年間の講義)

- (3) (哲学) 修士課程 (Master of Philosophy Course 最低一年間の講義並びに論文提交)

- (4) 哲学博士課程 (Doctor of Philosophy Course 最低三年間、論文提出、講義はなし)

右の四課程の内、(1)と(3)はわが国の大学院制度には見られないもので、(1)はいわば学部の卒業生が更に一年間の教育を受ける「専攻科」に相当し、(3)は形の上ではいわゆる修士課程と博士課程の中間に位置するものである。ただし修

学年数や教育内容などより見れば、(3)がわが国の修士課程と同程度のレベルであろう。いずれにせよ右の制度は、スリランカ及び他の外国の諸大学にもその例が見られる或る程度一般的な制度であるが、しかし次の諸点はケラニヤ大学の当大学院の顯著な特色と成つている。

先ず、授業に使用する言語によつて、シンハラ語クラスと英語クラスに分けられている。スリランカの諸大学は、独立後二十年程過ぎた頃より、一種のナシヨナリスティックな雰囲気の

下に、一部の理工系の学部を例外として英語による授業を禁止し、自国語たるシンハラ語・タミル語による教育を徹底させた。その結果、文系の学部は原則としてすべて自国語による授業のみとなり、このシステムで教育された四十歳半ば以下の世代は、多く、教師も学生もそれ以前の英語が堪能な世代とは比較にならない程、英語に弱くなり、そのため国際的感覚も乏しくなつてしまつた。この様なマイナス面に対する国策上の反省もあつて、たとえ大学院レベルの限定された範囲内のこととはいゝ、当大学院では、英語による教授のコースを導入したわけである。この試みは文系の教育機関では今なお例外的な事例である。因みに一九九一年一月より

始まる九一年度の各コースの在籍者数は次の通りである。^⑤

専修課程 シンハラ語クラス 七四名
同 英語クラス 一七名

(文学)修士課程 シンハラ語クラス 一四七名
同 英語クラス 一二名

(哲学)修士課程 四一名
哲学博士課程 九名

合計 三〇〇名

右の表によつて、やはりシンハラ語のクラスの人数が英語クラスのそれを大幅に上廻つてゐることはよく分かる。そしていざれにしても、仏教学の分野だけで総数三〇〇人というのは驚異的な学生数である。スリランカの大学(学部)の入学者は、同年齢者の百人に一人程度といわれているから、その数字に照らしてみても、一大学の一分野の大学院在籍者数が三百名というのは、大変な盛況である。この盛況の秘密はい

つたい何であろうか。次にこの点について説明したい。

これは実際に現場に臨んで初めて認識したことであつたが、当大学院は非常にユニークかつ積極的な教育経営方針を採用していた。その第一は、事実上、目下日本でも盛んになりつつある成人学級・公開講座ないしはカルチャーセンターの方式の採用である。つまり当大学院では、いすれかの大学の学部の卒業生、即ち学士号を有する者ならば分野を問わず誰れども志願出来るという前提に立っている。この場合、面接などの選考を経て、仏教学を初めて学習する人は先ず専修課程に入り、ついで（文学）修士課程に進み、成績によつては更に上級のコースに順次上つて行くという段階が用意されているわけである。また学部で仏教学を専攻した者は、勿論、試験に合格しさえすれば（文学）修士課程から始める事になる。この様に入学者に対し

て間口を拡げることによつて、希望者の数が増大したと見られる。次にその第二点。右の方式は、更に、授業時間を午後から夕方にかけて集中させることによつて、職業人に対しても門戸を開くこと、及びコロンボ市内の交通至便の地に開講することによつて、彼等に対して仕事と学習の両立の便を与え、その効果を一層發揮している。また勿論、年齢の制限はないわけであるから、定年退職後の入学者もかなり含まれている。そして老若男女の多様な経歴年齢の人気が集まつたクラスには、相互に良い意味の刺激が生まれて、プラスになる面が多い様である。第三点は、英語クラスを設けることによつて、シンハラ語の出来ない外国人に対しても門戸を大きく開いていることである。クラスの具体的な構成の例は次節で改めて説明するが、とにかく以上の様に、当大学院は様々な形の積極的な開放策を探ることによつて、一種の生涯教

育・社会人教育・国際教育の場を広く提供しているわけである。しかもそのすべてのコースが、大学公認の正規のコースとして、それ相当の学位の授与と結びつき、正式の資格として広く社会的に認知されるシステムとなっている、この点がまた受講生にとっての一つの魅力となつてゐるのである。この点は、わが国のその場限りの公開講座やカルチャーセンター方式とは大いに異なるところであろう。総じて言えば、当大

学院の以上の様な在り方には、一般に大変閉鎖的で中途半端な日本の大学院にとつて、参考とすべき点があるのでなかろうか。

更に当大学院のもう一つの大きな特色は、その組織が、事実上、複数の大学の連合体となつてゐる点である。大学院の最高議決機関としては、大学院長、文部次官などをメンバーとする「運営委員会」(Board of Management)という行政機関があるが、その下にあって実質的に

教育研究上の権限と責任を持つてゐるのが「教授会」(Faculty Board)であり、そのメンバーにはケラニヤ大学の教授スタッフだけではなく、他の幾つかの大学の代表的な仏教学者も加わつてゐる。また実際の教員組織には、他大学の更に多くの教員が参加していて、さながら複数の大学の合同の教育研究機関という感がある。

三 正規の講義

私がコロンボに到着したのは七月三十日の深夜で、大学院の第三学期（八一十月）は八月一日から開始された。当初、私の講義題目は、（文学）修士課程では「日本の禪仏教」、専修課程では「日本の仏教文化」という予定で、その準備をして出掛けたのであつたが、先方側の要望で、急拵、次の様に変更された。即ち、修士専修両課程共に「日本の禪仏教」について講じ、この



或る日の講義風景（修士課程）

正規の授業の外に、受講生以外の人も自由に聴講出来る、いわゆる「公開講義」（Public Lecture）を二回実施する。そしてその内の二回は、当ケラニヤ大学大学院においてではなく、はるかに離れたキヤンディ市郊外のペラデニヤ大学において行なうこととなつた。このペラデニヤ大学での公開講義は、当大学に居る旧知のデ・シリバ教授の強い要請によるものであつた。更にもう一つの重要な公務として、博士論文の審査という仕事も急に委嘱された。これら二つの緊急の公務については、後に改めて述べる。

正規の講義は、修士課程が毎週火曜日の三時より一時間、専修課程は木曜日の四時から一時間実施されたが、休日や特別な所用と重なつて、実際には、修士過程で六回、専修課程で五回の授業を担当した。講義の内容としては、インドの禪の歴史、中国の禪の歴史、日本の禪の歴史、道元の生涯と曹洞禪、臨済禪と公案、禪の文学

(俳句・和歌など)などの諸テーマを探り上げ、初心者にも理解出来る様に解説した。その際、受講者は原則として上座部仏教の比丘か在家信者である点を考慮して、可能な限り上座部の教義や実践との比較において、禅の特色を説明する様に努めた。

次にその受講生について説明すると、専修課程の学生は総数十六名、修士課程は十二名、そしてその内訳は実に多様多彩であった。専修課程の十六名の内、九名が比丘、四名が普通の職業人、一名がカトリックの神父、一名がカトリック神父を目指して修学中の人、そして一名が女性であった。九名の比丘の内、何んと五名が中国大陸出身者で、二名がスリランカ人、マレーシヤ人とバンガラデイシュ人が各一名ずつであつた。一般職業人の中には大学の法律学講師、スリランカ中央銀行の重役、翻訳家、イギリス人のコンピューター技術者などが含まれてい

た。その他実際には、若干名の無登録聽講者も混つており、その中には韓国人男性も一人いた。年齢は全体の最年少が二十六歳、最年長が五十二歳であつた。また修士課程では、比丘が二名、カトリック神父が二名、残りは一般在家者であった。在家者の内、四名は女性でカレッジの英語教師、退職教師、主婦が各一名、そして大谷大学の仏教学科を卒業した日本女性も受講していた。男性の在家者の内訳は、文部省の退職官僚が二名、大学の英語教師と退職した化学技術者が各一名であつた。なお比丘の二人は共にビルマ人で、他の受講生は日本人女性一人を除いてすべてスリランカ人であつた。年齢は三十六歳より六十五歳までであつた。

以上の様に、専修・修士の両課程共に、出家者と在家者の双方にわたり、また男女両性にわたり、国籍・職業・年齢など実に多様多彩なメンバーの集まりであつたわけだが、全員揃つて

学習意欲が旺盛で熱心に受講していた点は共通していた。午後の暑い最中を、それぞれかなりの時間をかけて登学し、質問なども仲々活潑であつて、また欠席者は大変少なかつた。そして、担当した両課程共に、外国人が比較的多数であったこと、及びスリランカ人でも比較的年輩の人（五十歳前後以上）が多かつたことは、これが英語による授業のクラスであつた点にも、その一因があると考えられる。外国人は、勿論、シンハラ語よりも英語を選択する人が多いし、スリランカ人の場合でも右の年齢層は英語による教育を多く受けた世代である。一方これとは対照的に、シンハラ語による授業のクラスは、恐らく全員スリランカ人の学生で、しかも比較的若い世代の人が多いと見られる。そして当然のことながら、シンハラ語による各課程の人数ははるかに多く、その中には比丘もかなり含まれていた。



或る日の講義風景（専修課程）

四 公開講義

前にも触れた通り、先方側の要望により公開講義は全部で三回実施された。その概況は次の通りである。

第一回

日時 平成二年八月二九日午後四時一六時
場所 国立ペラデニヤ大学文学部
主催 同学部仏教学科（司会・ウイターナツチ主任教授）

講題 日本の仏教研究の現状 (Buddhist Studies in Japan Today)

聴講者 約三十名

右の講題は先方の希望でもあつたわけであるが、とにかく日本の仏教研究の歴史と現状については殆ど何の情報もなく、知られていない。

その原因の一つは、スリランカが歴史的に英語圏の国であるために、日本語を解する学者は殆

どおらず、従つて強い関心はあつても日本の仏教学に対する知識は極めて乏しいこと、そしてもう一つは、日本の研究者が自国の研究史や研究成果を、外国語（例えば英語）によつて外国人に知らせようとする意欲と問題意識に乏しい点にあると言えよう。そこで私は極めて初步的な情報も含めて、今日のわが国の仏教研究の特徴、達成点、主要な研究者とその業績、将来の課題などを中心に、次の諸項について概説した。

1、序論

1、歴史的背景

2、研究分野の分類

1、研究機関と組織

1、大学

(1) 国立大学

(2) 私立の仏教系大学

(3) その他

2、特殊な研究機関

3、仏教系学会及び仏教系協会

(1) 全国規模の組織

(2) 大学内の組織

(3) 地域的組織

三、学位と教育制度

1、学士号

2、修士号

(3、哲学博士号 Ph. D.)

4、文学博士号 D. Litt.

四、学術雑誌と記念論文集

五、最近の主要なる研究成果

六、刊行中のシリーズ出版物とプロジェクト

七、新しい研究傾向と課題

1、コンピューター利用の研究

2、学際的研究

3、現代仏教に関する研究

4、国際的研究

第二回

日時 平成二年九月五日午後四時—六時

場所 ケラニヤ大学当該大学院

右の講義において、私は、明治以来の過去一世紀にわたり、日本は欧米・インド・東南アジア・東アジア・チベットなどの諸国より、常に最高の仏教研究の方法論・資料・成果を学んでこれを採り入れつつ、他方では、古来の伝統的な研究の蓄積をも活かして、非常に高水準広範囲かつ多岐にわたるユニークな仏教学を確立するに至った点を強調し、具体的にその成果を紹介した。また最近の新しい研究上の傾向や課題、更には目下進行中の新しい研究プロジェクトなどについても、出来るだけ詳しく説明した。その結果、聴講者は日本の仏教研究者の層の厚さ、幅の広さ及びその水準に驚いた様子であったが、中でも特にコンピューター利用の新しい研究とその成果には強い関心が集まつた。

主催 同大学院（司会・遠藤敏一講師）⁽⁸⁾

講題 日本の仏教研究の現状

聴講者 約四十名

先方の希望により、ペラデニヤ大学での講題と同一のものを採り上げたが、勿論、聴講者は一人も重複していなかつたので、この点は全く問題なかつた。本公開講義の通知は、コロンボ市内及び近郊の諸大学などにも送られていたので、これらの諸大学などよりの来聴者もかなり加わつてゐた。聴講者の反響としては、前回同様、日本の仏教学に対する質量両面よりの評価は高く、またコンピューター利用の新しい研究はやはり人々の耳目を引いた。

第三回

日時 平成二年九月十九日午後四時—六時

場所 ケラニヤ大学当該大学院

主催 同大学院（司会・カルナダーサ大学院



第三回の公開講義

長)

講題(1)十一支縁起説成立の時期 (The Time of Formation of the Twelve Link Chain of Dependent Origination)

講題(2)世界のペーラ研究仏教研究に対するペーランカの役割—ペーリ文献協会の刊行物を中心として (The Role of Sri Lanka for the Pali and Buddhist Studies in the World—with special reference to the Pali Text Society's publications—)

聴講者 約四十名

第二回の講義は、これが最終となるので、講題を一つ採り上げた。第一のテーマは、原始仏教以来、全仏教史を通して重視されて来た基本教理の一つである「十一支縁起説」の成立に関する問題である。縁起思想の代表的な教説である

十一支縁起説は、最初期の經典である『スッタ

ニアーダ』の古層などには未だ見られないので、これは原始仏教時代の中で或る年月を経た時期に出来上つたものと考えられる。しかし所属部派の異なる現存のニカーヤ・阿含・各種の律藏・サンスクリット残存經典などを広く精査すると、各部派の文献にほぼ共通して十一縁起説が説かれていることが判明した。これによつて、この十一縁起説は、インドの仏教教団が根本分裂を起す以前に既に成立していて、それがそのまま各部派に共通して伝えられたと結論出来る。以上の様な研究を先ず詳しく論じた。これは、どちらかと言うとペーリ文献にのみ傾斜し勝ちなスリランカの学者に対して、広くパ・梵漢の各種資料を比較検討することが必要である点を強調する意図をもつてなされた講義であった。⁽⁹⁾

一方これに対しても第一のテーマは、この国の学界を激励し彼等の得意とする分野で世界の学

界に一層、貢献してもらいたいという希望をもつて採り上げたつもりである。即ち世界のパリ文献・パーリ仏教の研究は、大英帝国の絶頂期に当る一八八一年にイギリスに設立されたパリ文献協会 (Pali Text Society)を中心として、国際的な協力態勢の下に促進されて来た。

そしてかつてはスリランカの有能な学者は多数、パーリ原典の校訂本や英訳などをこの協会より出版し、国際的に重んぜられていた。しかるに近年は、右協会自体の活動も往年ほどではなくなっているせいもあるのか、スリランカの学者の本協会を舞台とする国際的活躍も、以前よりは低調である。私は偶然にも右の協会の日本代表の職 (Regional Representative for Japan of the Pali Text Society, U. K.) を委嘱(19)られていて資料を豊富に所有しているので、本協会の数百点にも及ぶ全刊行物の中よりスリランカの学者の手に成るものをすべて列挙解説

し、これを高く評価しつつ、先人の偉業を継承する意味で、この分野での今後の継続的貢献を強く要望したのであった。

五 博士論文の審査

既に述べた様に、この公務も当初の予定にはなく、出発の直前に、急遽、要請されて來たものであつた。そのため当方も急いで必要と考えられる文献資料を揃えて持参した。審査の対象となつた哲学博士 (Doctor of Philosophy) 論文とその審査の経緯は、およそ左記の通りである。

提出者 K・ダンマジ ラーティ師 (Ven. K. Dhammadajoti)
論題 漢訳法句經の英訳と研究 (The Chinese Version of Dhammapada translated into English with Introduction and Annotations)

審査機関 ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院
審査員 M・パリハワダーナ教授 (Prof. Dr. M.
Palihawadana)⁽¹⁾

K・アヌルッダ師 (Ven. Dr. K.
Anuruddha)⁽²⁾

森 祖道 (Prof. Dr. Sodo Mori)

周知の通り、法句經の漢訳は四種類も存在するが⁽³⁾、ダンマジヨーティ師は、未だ英訳されたことのない維祇難等訳の『法句經』一巻を採り上げ、その英語全訳を詳しい註記を付して完成させた。同時にその序論として、パーリ語・ガンダーリー語・梵語、他の漢訳など各種の法句經との比較において、本テキストの詳しい文献学的研究をなし、両者合せて学位請求論文として提出した。一方、当該大学院としては、この論文が博士論文としては設立以来最初の審査論文であった。その上、その内容が漢訳經典に關係するものであるので、この分野には通常、無

縁なスリランカ人の学者だけで審査することは困難と判断し、急據、私に協力を求めたわけである。著者ダンマジヨーティ師の漢訳『法句經』の英訳は、世界で初めての試みであつたので、これは十分に評価し得る業績であるが、問題は、その序論に示された文献研究であつた。著者は、パーリ・サンスクリット・中国語・漢文・英語などの外に、日本語にも通じていて⁽⁴⁾、水野弘元博士の大著『法句經の研究』(春秋社、昭和五六年)、その他、博士の法句經に関する諸研究を参照することが出来た。著者は右の書を水野博士を訪問した折に、博士より直接贈与されたとのことである。とにかく、著者はこの名著を百ペーセント活用して自身の研究を纏めた。従つてそれは、部分的には自説を主張している箇所も見られるが、大枠においては、水野博士の所説を超えるものではない。勿論、博士の研究は日本語で著わされているので、それを参照し



博士論文の口述試験風景：向って左よりアルッダ師、パリハウダーナ教授、筆者、カルナダーサ大学院長、事務長、ダンマジョーティ師（受験者）

つゝ英語で研究を発表した点は、それ自身独自の価値を有するものと評価されるべきであるが、しかし内容的には右に述べた通りであった。そしてこの点を指摘し得たのは、審査員の中で私だけであったので、この様な点からも私の参加は役に立つたと考えてよからう。とにかく私は、右の様な諸点を纏めた審査報告書を作成して大学院に提出した。三名の審査員、それぞれの審査報告書が出揃つたところで、平成二年八月二十二日午前中に当該大学院において、右論文作成者に対する口述試験（Oral Examination）が実施された。試験は大学院長カルナダーサ教授の司会の下で行なわれ、論文作成者と審査員の間で種々なる質疑応答がなされた末に、審査員の協議に基づいて審査論文は合格と判定された。そこでその旨を記述した最終的な審査報告書が早速作成され、審査員全員と司会者がそれぞれそれにサインをして審査はすべて終了

した。因みにわざか二ヶ月の私の滞在期間の半分近くは、主としてこの審査のために費やされる結果となつた。

六 結語—今後の課題—

以上、当該大学院において客員教授として要請された公務とその結果について、各事項に分けて報告したわけであるが、最後に、今回のさやかな経験を基として今後の課題について若干述べてみたい。

(1) 先ず、何もスリランカのこの大学院に限らず、広く世界各国の諸大学などとの学術上の人物交流を促進し、要望があればどこへでも出講出来る様な人材の育成が急務であろう。勿論、現在でも外国の学者との交流は、或る意味では非常に盛んである。しかしままだ外国との交流と言えば、「明治百年」來の風潮で、外国に留学するとか外国人学者を日本に招いて教えを乞う、

という一面に傾斜し過ぎてゐる様に考えられる。つまり学術文化上の輸入超過現象がそこには見られるのである。今後共、勿論、彼等から学ぶべきものは謙虚に学びつつ、しかしその方でもしわれわれに彼等より優れた点があるとするならば、それを彼等にも知らしめて、知識の共有を目指す必要があろう。そうすれば、そこに初めて「互恵平等」の学術交流が実現するものと考える。そしてそのためには、(1)学問上の実力、つまり教える内容を充実させると共に、(2)それを十分に表現する手段、つまり国際的に最も通用する外国语(例えば英語など)を読み、話し、書く能力を養わなければならぬ。こと仏教学の分野では、(1)に関しては日本には非常に優れた学者が輩出し、日本語で著わされたその業績の大きな蓄積があるわけだが、われわれは今なお(2)の点に関しては決して十分とは言えないと思う。今後の若い世代に大きな期待を寄

せる所以である。

(2) 次は、日本の研究者の大多数が所属する日本の大大学には、通常、「有給研究休暇制度」、いわゆる「サバティカル休暇制度」が未だ確立されていない点が問題である。この制度は、原則として六年間、学生の教育に従事すれば、一年間の有給研究休暇が与えられるという制度（従つて三年間で六ヶ月、二年間で四ヶ月の休暇がとれる）である。欧米の大大学は勿論のこと、かつての植民地時代に欧米人によって設立されたアジア・アフリカの多くの国の大大学にもこの制度は当初より導入されている。中で独り自力で大学作りに励んで来た、明治以来の日本においてのみ、学者の再充電に不可欠な余裕を与えるこの制度は何故か存在していない。そのため、日本の学者は一旦大学に奉職した後は、通常の短い休暇を利用する以外に、海外に出掛けることは仲々困難であり、特に長期の滞在は普

通は不可能である。従つて例えば客員教授として招聘される様な機会があつても、一年を通して出講することは出来ず、その協力も中途半端なものに終り勝ちである。言うまでもなくこの様な場合に、外国ではこのサバティカル休暇をフルに利用するわけである。従つてこの点は、日本の今後の文教政策、国際交流政策上の大きな課題であると考えるのである。

(3) 右の二点が仮りに改善された結果、国際的に通用する有能な学者が輩出し、彼等に時間的余裕も生まれたとして、なお残るのは経済的問題であろう。本「報告書」の「序言」でも述べたが、先進国同志の場合はともかく、先進国から発展途上国へ出掛ける場合は、それが留学であれ研究であれ会議であれ出講であれ、自國側の経済負担がまず当然のことであろう。そのため国際交流基金の様な国家的機関も存在するわけであるが、周知の様に、その予算規模は今な

お極めて小さく、他の先進諸国とのそれとは格段の差がある。つまり日本人は今なお自国の学術文化の輸出啓蒙という問題には関心が低いのである。その上、これら諸機関の当事者の考えでは、日本からの文化的国際交流と言えば、日本語の教授とか伝統的な日本芸能・文学・武道などの紹介とかいうことが中心の様である。更には、いわゆる「政教分離」の固定観念に支配されて、彼等は宗教ないしは宗教文化と関係のある学術文化交流については、極めて理解が乏しい様である。

そこで少くとも仏教ないしは仏教研究上の国際交流は、どうしても仏教界自身がその経済的負担をして、これを推進しなくてはならないであろう。つまり仏教界の諸団体が自ら淨財を集めてこれを有効に使用し、人物の派遣、人物の招聘を盛んにし相互の交流を一層活発にすることが、是非共必要なことと考える。

大変抽象的な理想論あるいは單なる常識論に終結したかも知れないが、以上の三点を今後の課題として指摘し、本報告書の「結語」としたい。

註

- 1、現住所は、No.9, Gower Street, Colombo-5.
- 2、またロサンゼルス禪センターを設立し主宰されておられる前角博雄老師よりは、講義の参考資料として同センター関係の貴重な資料を、同じく駒沢大学の小笠原隆元教授よりは海外における禪の活動状況に関する諸資料を頃戴した。この段深く感謝する。
- 3、*Ferguson's Sri Lanka Directory, 1985-88*, Colombo 1985, p. 1439.
- 4、*University of Kelaniya, Postgraduate Institute of Pali and Buddhist Studies, Prospective*

tus 1989-1992, Colombo 1989.

5、大学院長カルナダーサ教授の教示による。

6、現在の大学院長 (Director) Y・カルナダーサ教授は、パーリ・アビダンマの専門家で数年前に来日し、各地の大学で講義をした。

7、Prof Lily de Silva同教授はペラデニヤ大文学部長、仏教学科主任教授も務めた長老教授であり、またケラニヤ大当該大学院の教授会メンバーでもある。わが国にも数年前に來訪したことがある。

8、当日、カルナダーサ大学院長が病氣欠席しだため、日本人講師の遠藤氏が代理を務めた。

9、本講義の全文はその註記と共に、同一の英文題名で左記の書に収められて出版される。

『前田惠學博士頌寿記念・佛教文化學論集』

11喜房佛書林、平成三年七月刊行予定。

10、例、*Pali Text Society, List of Issues*

1989, Oxford 1989.

11、シユリ・ジヤワルダナ大学言語文化学科

主任教授。彼の専門はサンスクリット学であるが、パーリ語の法句經を英訳した実績もある。*The Dhammapada translated by John Ross Carter & Mahinda Palihawadana, New York, Oxford, Oxford University Press 1987.*

12、ケラニヤ大学パーリ学上級講師、仏教・パーリ大学前副学長。

13、いすれも『大正新脩大藏經』第四卷所収。

(1)「法句經」二卷、吳黃武二年(一一一四)維祇難等訳。(2)「法句譬喻經」四卷、西晉惠帝代(一九〇—三〇六)法炬・法立共訳。本經には英訳あり。(3)「出曜經」三〇卷、姚秦建元六年(三九九)竺仏念訳。(4)「法集要頌經」四卷、宋太平興國七年(九八二—一八四)天息災訳。本經にも英訳あり。

14、彼はマレーシヤ国籍の中国人で上座部の比

丘となり、現在はスリランカの寺院の住職を務めつゝ、当該大学院の専任講師として大乗仏教の講座を担当している。¹⁵

15、彼は日本語を台湾において学習した。

ケラニヤ大学パーリ学仏教学大学院の看板



アメリカ禪仏教のこと覚え書き

IV

—ZCNYの活動と展望—

島崎 義孝

はじめに

一九八七年四月下旬、筆者はスカラシップの留学僧として、当時まだリバーディール（Riverdale）にあつたゼン・コミュニティ・オブ・ニューヨーク（以下、ZCNYと略す）を初めて訪れた。以後、同年六月から十一月にかけてのおよそ半年間を最长に、昨年の夏まで数回にわたり長短の滞在をくりかえしている。この間、ヨーロッパでの接心も含め、他のゼン・グルー

普でも生活し、それらについてはすでに何回かにわたって自分の所感や観察をつづってきた。そうしたなかでZCNYは筆者にとってもつとも親しいグループのひとつであり、また報告を書く機会はいくらもあつたし、そのつもりでもいたがどういうわけか何もせずに今日に至ってしまった。その理由はZCNYの活動をどう評価するかという点にかかわってくるが、後にも述べるように、このグループがきわめて著しいテンポで変化しており、評価などという悠長

な作業をしているうちにどんどん新しい試みに着手、展開させていることにあるのは間違いない。実際、間欠的にZ C N Yを訪れる度ごとに所在場所、活動内容、人員構成が異なっているのに驚かされる。ニューヨークというアメリカでもおそらく最も動きの激しい土地柄にあるとはいえ、Z C N Yの様変わりのはやさはまさに異例といってよからう。そしてこうした激しい変化のなかで、日本社会であればとうてい実行不可能と思われるさまざまなもの（実験）が行われているが、同時に斬新さあるいは展開のはやさそのものから来る多くの問題を孕んでいることも事実のようである。

前回のレポートで私は、歴史のあさいアメリカの仏教グループでは指導者の占める比重がきわめて大きいことを指摘したが、Z C N Yはその最も顕著な例であるといえよう。まず、第一に当初からこのグループには、アメリカ独自の

仏教、あるいはゼンの修行形態や組織はいかにして可能かという志向が強く伺われる。この点については、日本のいわゆる在家といわれる人々よりも宗門人にとって、むしろ理解の及びがたいところがあるのでないかと思うことがしばしばある。日本の宗門人は今日では大半が世襲を行つてゐるため、寺院とか宗門を外側から批判的・客観的に見るという態度を残念ながらほとんどもちあわせていない。すでにできあがつてしまつた伝統への固着がかえつて、新たに生じてくる現象を無視したり、無闇に拒絶するという態度としてあらわれてくるのである。とりわけZ C N Yのような展開を見せてゐる集団は、ゼン・グループとはいえにわかには同調しがたい点も多分にあろう。このことは最初にふまえておかねばならぬ点であろう。

十年間に三度も所在地を移している——この事実だけをとつてみてもZ C N Yの変化のはや

さを窺うことができるが、小文はZCNYの活動内容の変化を明確にするため年代を追って観察してみたい。場所の移動はZCNYのばあい、同時に「坐禅」→「ベーカリー」→「ソーシャル・アクション」というプラクティスの重点移動である。ZCNYの当初からの特色は、他のグループが基本的にいえば坐禅を強調し、多少の差異があるにしても、ゼン・グループとしての性格を一貫して明らかにしてきたのとは対照的に、必ずしも坐禅のみをとりあげていな。彼等は活動の基盤として「五智如来」のイメージを借用し、コミュニティの修行生活を五つに分類して、これらを相互に関係づけた。「坐禅」「社会福祉活動」「学習」「超宗派」「人生」計の五つである。知られているごとく

大日如来が法界体性智を現すように、他の如来はそれぞれ大円鏡智・平等性智・妙觀察智・成所作智に対応している。五智はすべて菩薩の悟りの智慧であって、ZCNYはプラクティスを生活全体にわたって徹底化させようとしたといえよう。それはゼンといえば事実上、坐禅のみが行われて、内容が日常生活のなかで血肉化していきことが多い、という反省からきているらしい。

いずれにせよZCNYの活動は、先に述べた三段階にわたるプラクティスの重点移動、あるいは本拠地の移動を縦糸とし、五智如来の曼陀羅を横糸として織りなされてきたということができるだろう。

「五智如来」は大日如来を中心として周囲を阿闍・宝生・阿弥陀・釈迦の各如来がとりかこむ金剛界の曼陀羅によつて示されるが、「五智」は

ZCLA（ゼン・セントラ・オブ・ロサンゼルス）を発つた一行十人が自家用車やトラック

を連ね、はるばるアメリカ大陸をニューヨークまでたどりついたのは一九七九年のことである。ブロンクス区の一画、リバディールのモシユル（Moshulu）通りにZ C N Yは最初のセンターを設けた。二階建のアパートで、地上階は店舗があつたが、Z C N Yは禅堂と事務所を同階に開き、上階をメンバーの居室として使つたという。

グレイストン（Greyston）を購入したのはそれから間もなくのことである。私が初めて訪れたときのZ C N Yである。ハドソン川とその対岸に屏風をたてたように切りたつた絶崖を眼下に臨む高台のマンションで、二エーカーの芝生の庭が川までなだらかに延びている。この建物はもともとドッヂ家の夏季の別荘で、一八六三年の建造になることが玄関横のプレートに示されている。ワシントンのスミソニアン学術協会やニューヨークの聖パトリックを手がけたジェ



現在のZ C N Y付近の風景・ハドソン河を臨む(対岸はニュー・ジャージー州)

イムス・レンヴィークという著名な建築家の設計
というが、どつしりとした誠に重厚な構えである。コロンビア大学のティーチャーズ・カレッジからの購入だが、六〇万ドルという大金の工面が徒手空拳のZ C N Yにどうしてついたのか。しかもモスロー通りのアパート借入から僅か二ヶ月後のことだという。当時、中道を行くべき仏教のグループがぜいたくな買い物をするべきではないという相当強い反対意見がメンバーのなかにはあつた。しかし、この高価な出費をけつきよく決心させたのはニューヨークといふ大都市を活動の場として擁するZ C N Yが、将来の展開を見越してどうしても確保すべき施設だという判断があつたからだろう。事実、ゆつたりとしたスペースをもつグレイストンの建物はマンハッタンから交通手段を使つて三〇分という至近距離にあり、しかもさながら山中のような閑寂な一帯で、以後多くのニューヨーカ

ーが静修や各種ワークショッピングに頻繁に参加することになる。この時期にはとうじの通信記録をみると十二ヶ月間に二三回もの接心が行われている。おそらくZ C N Yが最もよく「坐つた」時期だろう。

Z C N Yが最初の生計活動をはじめたのは一九八一年になつてからである。それまではメンバーが各人に適当な仕事を見つけて、収入のいくらかずつを出し合つて、センターの維持にあてるなどしていだらしい。はじめての生計活動というのは同じリバディールにあるヨット・クラブの場内食料売場の経営である。これは言うまでもなく共同体維持のための企てであるが、ここで活動を通じて地域の中上流階層の人々にZ C N Yの存在を知らしめ、多くの協賛者や寄付を得たことは後の展開のためにはまさに好都合だつたといえよう。彼等のなかには新たにZ C N Yのメンバーになつたものもい

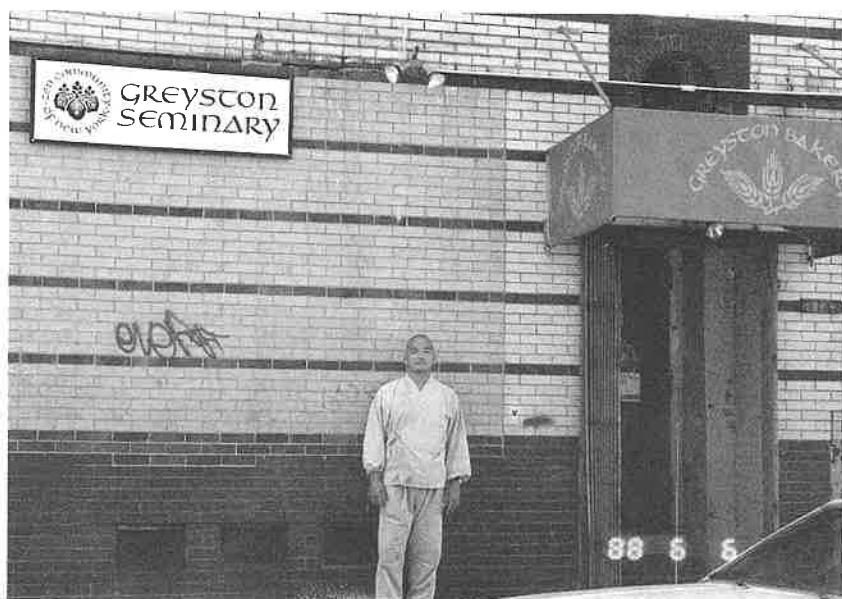
た。そしてついに百名を越える数に達するが、しだいにコミュニティをより安定した永続的なものにするために経済基盤を確立することが吃緊の課題として考えられるようになつた。ベーカリーの設立である。

いつたい、六十年代のいわゆる対抗文化の時代に、ヘゼンの爆発^{ハーフティス}といわれる現象があり、アメリカ人の多くの青年層がさまざまなレベルでこれに関与したが、そうした時期を経て八十年代にはアメリカ人のなかからゼン・グループの指導者が現れはじめた。Z C N Yはその一例だが、特徴的なのは東洋からやつてきた指導者たちが専ら坐禅を強調し、またこだわり続けたのとは対照的に、アメリカ人の指導者は基本的にもちろん坐禅を主軸に据えるものの、必ずしもそれに限定しない。いわゆるアートや社会活動まで修行に數えあげていることがあり、とりわけ積極的な営利活動に手を染めているのは

日本からのゼンの指導者には見られない着想であろう。その草分け的な存在がサンフランシスコ・ゼン・センターのタサハラ・ベーカリー、グリーン・レストラン、農場、温泉避暑地など の多角経営である。これらの仕事に携わることはワーカー・プラクティスつまり作務だが、少なからぬ収益をあげることによつて当該グループの運用には多大の貢献をなしている。Z C N Yがグレイストン・ベーカリーを創業したのは一九八二年、ヨットクラブとの契約が終わつた直後である。数名のメンバーがサンフランシスコ・ゼン・センターにパン、ケーキの製造技術習得のために派遣され、一方、グレイストンでは器具の購入・市場調査・セールスのために残つた人々が奔走した。ブルーミングデイルズ、グーゲンハイム美術館、世界貿易センターなど著名なホテルや公共施設のカフェテリアやレストランあたりから注文をとりつけたそうで、市

場開拓にずいぶん努力したにちがいない。その年のクリスマスにはすでに本格的な商戦に入っていたというから、このあたりからもZ C N Yの活動テンポのはやさが伺えようというものだ。おそらくたしかな手応えがあつたのである、グレイストンの台所はベーカリーとしては間にあわせて手狭であつたから、リバディールから約五キロ北上したヤンカース (Yonkers) 市にベーカリーを移した。ウッドウォース (Woodworth) 通りにあるこの赤レンガの三階建は当初ほとんど廃屋に等しい状態だったといふが、献身的な彼等の作業によつて修復された。

ところで、右のようなZ C N Yの展開の仕方に対する賛否両論があつた。反対意見はベーキングがゼンであるわけがないし、金持ちの美食家を楽しませるつもりはないというもので、この種の考えをもつ人たちはZ C N Yを去つた。



グレイストン・ベーカリー正面で(筆者)



グレイストン・セミナリーの正面

グレイストン・セミナリー遠景



かと思えばベーキングに興味をもつて、観念ではない現実世界のゼンの修行だと考えてやつて来る人々もあつた。何か新しいことを始めるたびどとにある人々が去り、ある人々がやつて来る——このパターンがZ C N Yではきわめてはつきりしているように思われる。

翌八三年には事務所をモスロー通りに再び移している。これからしばらくの間、Z C N Yの活動は三ヶ所で行われることになる。ヤンカースの工場で作られた製品は、モスロー通りの事務所に隣接するカフェテリアで販売された。詩や童話の朗読、写真の展覧会がしばしばここで催され、とくに日曜日の夜には各種各地域・時代の音楽演奏があり、リバディールの住民も共にこれを楽しんだという。Z C N Yメンバーが一五〇人を越えたのはこの時期で、以後メンバーは着実に業績をのばし、並行してグレイストン

では各種セミナリーがさかんに行われていた。

おそらくこの時期のZ C N Yがもしごく一般的な人間の日常生活という点からみれば、最もバランスがよく保たれていたのではないか。

多少の不満や感情的な齟齬があつたとしてもメンバーの最大公約数的な満足を得ていたはずである。八二年にはZ C N Yの指導者であるバーナード・グラスマン (Bernard Glassman) 師の晋山式が行われた。

ここで同師について少し紙幅を費やしておく必要があるだろう。グラスマン師は一九二九年、ニューヨーク市ブルックリンの生まれのユダヤ系アメリカ人で、女ばかりの姉妹に最後の男子として生まれた。NY市内の大学で宇宙工学を学んだのちは、ロサンゼルスの航空会社ダグラス社の技師として働くかたわら夜間はUCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校) で数学を専攻、哲学博士の学位をもつ。また、若年か

ら宗教的方面にも関心が深く、長するにおよん
で様々な宗教書に接した。Z C N Y がヘマンダ
ラのひとつに超宗派を数えているのは、主管
である彼の精神的遍歴に負うてゐるところが大
きい。しだいに仏教書、とりわけ禪に関する書
物に親しむようになり、『甘露門』には最も馴染
んだという。共同体生活にも興味をもち、大学
卒業のちイスラエルに赴きキブツに入った経
験があるが、結局ここは性格にあわずアメリカ
へひき返した。だが、この経験が後年、自らの
理想とする共同体をつくるさいに有形無形の手
がかりを彼に与えたであろうことは言うまでも
ない。いわゆるゼンとのかかわりは書物を通じ
て坐禅の独修を行つたことに始まるらしい。『禪
の三柱』（一九六五）は安谷白雲老師が欧米人の
ために述べたゼンの紹介をフイリップ・カプロ
ー師が米訳した書物で、今日でも多くの人々に
親しまれているが、彼のばあいもそうであつた。

同書出版の二年後、ロサンゼルス神智会で安谷
老師の警咳にはじめて接した。その折、通訳を
つとめたのが後年、Z C L A（仏真寺）を創設
する前角師で、三師弟の仮縁がここに開いたと
いうべきだろう。爾來参禪を続け、一九七〇年
に得度する。このころ職を辞し、家族ともども
Z C L Aに移り住んでプラクティスに専念す
る。七〇年は前角師が芋坂光龍老師を招じてZ
C L Aで摂心を行い、グラスマン師はそこで精
神上的一大転機を迎えたという記事が、ピータ
ー・マシスン氏の著書『九頭龍川』（一
九八六）に見える。そして、七六年には臨済宗
で行う公案の修行にひと区切りがついたとい
う。Z C L Aで前角老師の右腕として活躍する
ようになつたが、このセンターでメンバー数が
急速に増加してゐるところいろいろな事業、たと
えば地域住民のための診療所をはじめ、建築・
造園・縫製・配管などを始めたのは主としてグ

ラスマン師の発想になるのではないだろうか。

とりわけ診療所の開設などはその感が深い。

こうして七九年のZCNYへと続くわけである。

II

「五智如来」のうちZCNYの活動の中心がグレイストン・セミナリーにあつた時期には、^{学習}「超宗派」も重要な要素であった。この二つは後にはしだいに比重を低下させていくか、少なくとも表面からは姿を消していくようになる。

「学習プログラム」は一九八〇年に開始される。このプログラムは主に教典を使つての諸宗教の教理の学習だが、そなへかりではなく散文、詩、哲学、心理療法の勉強会が含まれた。メンバーのうちそれぞれの専門家が講師になるといふもじまわり式の学習である。諸宗教とは仏教

は言うに及ばず、キリスト教、ユダヤ教の新旧のバイブルが中心となる。仏教のテキストのなかには上座部の經典とされる『清淨道論(Visudhimagga)』やチベット仏教の『ミラレーパ十萬偈(The 100,000 Songs of Milarepa)』、あるいはわれわれにも馴染みの『法華經』や『正法眼藏』がある。八一年には曹洞宗で用いられる基本的なテキストについてのセミナーがもたらされた。「般若心經」「參同契」「十牛図」「八大人覺(道元著)」「宝鏡三昧」などがそれである。この年には週末や一週間の静修^{リトリート}が一二三回開かれているが、ZCNYの十年を通じてセミナーの最も盛んな時期であろう。そして翌八三年に最初の「超宗派静修」が行われ、主管のグラスマン師をはじめユダヤ教のラヴィ、キリスト教の神父が交替でリトリートを指導し始めた。ワーカープラクティスがそれと並行して行われ、行動のなかの瞑想がベーカリーやセミナリーで静

修の一部として意識的に組み込まれる。

教えることも大切なプラクティスのひとつ、
というのは永年、学校の教壇に立つてから禅の
師家になつた安谷白雲老師のやり方だと仄聞す
るが、こうした方法の是々非々はともかくとし
てそれは前角老師、グラスマン師も踏襲し、Z
CNYのセミナーではある程度経験のあるメン
バーに静修を指導させている。こうした方法が
採用された客観的な理由は、しかるべき指導者
数の絶対的な不足に求められるであろう。八四
年のヘ ^{ビギナーズ・マインド} 初心クラス／がその始まりで、日本
の禅門にはないやり方だと思われる。

学習プログラムはみられるようくへ超宗派／
と表裏の関係にあつた。筆者がはじめてZCNY
を訪れたときには一日のスケジュールが、宗
教グループらしく綿密に実行されていた。早朝
二炷の坐禅のあと、^{サーキス・ホール} 佛間で朝課、おわつて日
天作務、朝食、そしてベーカリーへ出勤、夕方

にまた坐禅という具合で、日曜日には各ワーク
ショッピングを開かれていた。朝のサーヴィスの後、
円陣を組んで何かの文句を唱え、皆で黙禱する
姿をしばしばみかけたものである。

III

ところで、グラスマン師によれば、作務とか
動中の坐禅というのはしばしば人が口にするに
もかかわらず日本などではそれほど真剣には捉
えられてはこなかつたという。彼じしんの考え
には作務という行為のなかにも坐禅と寸分ちが
わないものがある、いやむしろそのなかでこそ
真の坐禅というべきものがあるという信念があ
るらしい。ベーカリーを開設して以後とくにこ
の傾向が強く、彼はたびたび語つてゐる。

「われわれはどこにいたとしてもそこが禅堂
である。たいてい禅堂は特別な場所だと考えて
いるし、それはまことにその通りだ。そこで何

か特別なことをしようとして、精神を集中し、静寂にしようとするが、いつたん禅堂を離れるとまた心がザワつく。要するにわれわれは世界全体を禅堂とは見ていないのである。事实上それは無理で、休息も必要だ。だからわれわれは特別に設けられた場所や修行期間を必要とするのである。しかし、ほんとうは毎日が特別な日であり、どの場所もそのままで特別な場所である。ゼンは動かないこと、ではない。坐禅は不動にあらず。坐ることは行為のまつだなかで集中化された、力強い心身の姿勢なのである。少しでもバランスをくずせば、ゆらぐ。だから安定するためには強い集中力と敏速な動きが必要不可欠である。」

同師が言うように全力で回転しているコマは軸がたつていて、静止しているように見える。コマがすむ、というのがそれであるが、彼のこの坐禅觀はそのまま彼の人生觀でもあるようだ。

八三年までには新しいメンバーはグレイストンには住めなくなつた。さしもの豪邸も二五人ぐらいが居住数の限界だからである。ある人々は周辺のアパートなどに住んで朝晩の坐禅やその他の行事に通つた。居住メンバーはヘセミナープログラムの参加者という身分で、これらの人々はZ C N Y のすべての生活日程を消化することになつていた。コミュニティ内での仕事・同室者との共同・掃除・食器洗い当番にいたるまでの割りあて、他に坐禅、各学習クラスの参加。さらに通常の勤労者のごとく、朝は決まった時刻にベーカリーに『出勤』し事務や製造に携わつた。もちろんこれらはすべてプログラミスである。ベーカリーはクリスマスシーデンなどにはほとんど忙殺といつていいくらい、早朝から深夜まで連日の長時間労働になる。なにかにはこれはゼンなどではないと言つてZ C N Y を離れる人も少なからずあつた。居住メンバ

一は食事と部屋の他に、月額百ドルが支給されている。もちろんこれは大人の小遣いにも満たない少額であつて、生活をカバーできるわけではない。他に扶養家族手あて（ただしこれは乳幼児のみ）、治療費、被服費、休暇のさいの手あてが若干与えられるだけで、ベーカリーを本格的に開始する前のヘゼン・ヒルトンなどといふゆつたりとした気分はなくなってしまった。こうした展開にしたがつて一種の分離がZ C N Yにひろまつた。つまり主管であるグラスマン師の関心がベーカリー経営の方に移るようになり、非居住メンバーがコミュニティとの疎縁感をつのらせていったのである。ベーカリーのみがいわばプラクティスの場所になつて、Z C N Yで学ぶことはグラスマン主義でありゼンではないという不満とも称賛ともつかない感情を抱く人が数多く現われるのである。このあたりがアメリカの禅仏教の強みであり、同時に弱みと

もいえる。伝統がないかわりに自由な裁量が可能だが、それに伴うリスクも大きい。グラスマン師はベーカリー・ビジネスに傾注し、強気の経営を展開することになる。じじつベーカリーを始めた上四半期に売上げの見込みの二倍売つた。その時期にはベーカリーの建物買いとりとグレイストンのローンがそれぞれ一七万五千ドルあつたという。少なくない負債だが、八六年にZ C N Yとして赤字はなくなつた。歳出六五万ドルに対して、五〇万ドルをベーカリー収入、他は会費、プログラムからの入金、寄附で補われた。ベーカリーはその後も順調にのびつづけ、八七年に六三万ドル、八八年に九〇万ドル、そして次に述べるソーシャルアクションの一環として大手のアイスクリーム会社との提携があり、八九年には軽く百万ドルを超す収入をあげた。ある資料によるとアメリカ社会における新規事業は、四社のうち一社は最初の二年間に失

敗し、六〇%は六年目の創業記念日を迎える前に消え去っているというが、ZCNYの場合はうまくいた例のひとつである。こうしてZCNY、より正確にはグラスマン師はベーカリー経営によって大きな自信をつけたと言つていいだろう。

IV

さて、ZCNYの掲げる「五智如来」の最後の要因は社会福祉活動だが、実は「五如来宝号招請陀羅尼」は「甘露門」に含まれているのであって、「甘露門」の思想の実践、つまりソーシャル・アクションこそがグラスマン師の当初からのねらいであつたと思われる。この点が「ゼン」に心をよせる多くの人々に「グラスマンは何をやろうとしているのかわからない」と考えさせる事由のひとつであろう。「ゼン」といえば坐禅というのが、欧米社会でも通念になつてい

るからである。しかし、これは誠に興味深い実験であつて、わが国ではふつう禪の特質を、幽玄・静寂・簡潔・わび・さびなどとしているがZCNYのやり方は明らかにこうした態度に対する挑戦だと私は部分的には受けとつていて、宗教の社会的機能としてしばしば秩序の維持とこれとは逆に、秩序の突破^{ブレイクスルー}といふことがいわれるが、日本の禅宗史などは讀んでいると時代が下るにしたがつてどちらかといえば跳動感に欠け、自然愛好的になつてゐるといえなくもない。因襲と伝統に幾重にも覆われまったく守勢にたつて、伝統を誠の意味で生かし切れていない日本の宗門がこうしたアメリカン・ゼンの態度に学ぶべき点は決して少なくはないはずである。

現在のZCNYはホームレス問題に多大の力を尽しているが、ごく初期から小規模ながら似たような活動を行つてゐる。毎日、正午には食

事中であれ、会議中であれ、あるいは接心中であれ、世界平和を祈念して一分間の默想をしていたことがある。ベーカリーを始めてからは、売れ残りや余剰製品を近在の無料食堂(スープキッチン)に寄附したり、教会やその他の慈善組織に供出した。地域的にもリバデイール公園清掃クラブなどに積極的に参加した。そしてベーカリー経営がいよいよ軌道にのり、Z C N Y の資金基盤とトレーニングの場が確保されるによんで、近隣社会へどのように貢献するかが具体的な活動課題として俎上にのぼるようになったのである。こうした一連の過程はゼン・コミュニティの概念をヤンカースという小都市の地域社会(コミュニティ)にまで拡大しようとしたと考えることができるであろう。

Z C N Y 創立五年目頃ひとりのメンバーによつて書かれたレポートには、診療所・ホスピス・老人保養所ならびに介護施設などの開設が目標として考えていたが、いずれも地域社会で

の活動である。Z C N Y にとつて地域社会はプログラクテイスの場であり、「普廻向」つまり「願わくはこの功德をもつて普く衆生に及し、我等と衆生と共に仏道を成せん」を現実化すべき所であつたのだ。

さて、依然としてアメリカは最も富める国のひとつであることに間違いはないが、この社会においても貧困は今日でも大きな社会問題のひとつであることにかわりはない。いささか意外の感もあるが、他の諸国と同じようにアメリカの社会福祉事業は開拓時代からの貧困問題を軸に発達してきたといえる。一九六四年にはジョンソン大統領政権下で「貧困戦争」宣言がなされ、この前後に社会保障法改正(六二一年)「老人医療保健法」「連邦職業リハビリテーション法」(いずれも六五年)など一連の進歩的な貧困対策法案が成立した。そして現在、公的な発表(米

「国の賃金所得と貧困状態一九八八」米国商務省
国勢調査局・一九八九年十月によれば、アメリカ政府の認める貧困水準（四人家族で年収一二、〇九一ドル）以下の生活を強いられている人々が三一九〇万人（全人口比で一三・一%）にものぼり、とりわけ黒人や母子家庭で貧困が増大している。そのうち黒人、ついでスペイン語系の人々の貧困が白人の三倍から二・五倍。母子家庭の四五%が貧困水準以下、とりわけ黒人の母子家庭ではおよそ六〇%が水準以下にある。貧困状態にある人のうちおよそ二、三百万人がホームレス、つまり文字通り「家のない人々」であつて、日本の新聞でも冬場しばしば報じられているように、多くの人々が街路や駅の構内での生活を余儀なくされている。貧困者の都市流入→税金の高騰、治安の悪化→富裕層の郊外脱出→都市のスラム化という悪循環のために、ニューヨーク市の財政が破綻した

というニュースはわが国でも数年前に知られている。しかも貧困だけではない。それに絡んで強盗・窃盗・麻薬・売春などおよそ一切の社会病理的現象も多発していると言われている。これらの直接、間接の原因を貧困に求めるのもあながち見当ちがいではあるまい。アメリカにおいても貧困の問題はそれほど大きい。

グレイストン・ベーカリーのあるヤンカース市は歴史的にニューヨークへの労働力の供給地であったが、小規模ながらスラム化がすすみ、近年には都市としての活力が急速に低下し、中心部のさびれ具合は往年を知る人には目を覆うばかりだという。ここでもレーガン、ブッシュ政権の軍事費拡大、それに伴う社会福祉予算の削減を批判する声は強い。

ひとくちに「ホームレス」といつてもその内容は様々であり、老人・子供・独身成人・幼児をかかえた独身の母親・精神疾患・身体障害、

あるいはその両方をもつ人々などに分類されている。また、なかにはホームレスとしての生活を敢えて選択する人々もいると仄聞する。彼等に対し細かな措置が考えられているが、人権問題などもあって、実際の対応は容易ではなさそうだ。調査によればヤンカースには少なくとも、一三三三にのぼるホームレス家族があり（一九八七年三月）、彼等は同市の北方、ウエストチエスター郡内のモーテルに雑居していると見られている。しかし、彼らの大半はしばしば移動するので実態は把握しがたいという。子供は通常に交通機関を使うため、多大の出費と時間を費やさざるをえない。母子ともに慣れ親しみ、また住宅や職業を見つけるのに有利な近隣社会から遠ざかってしまうという結果になってしまっている。

一方、同郡には大半がヤンカース市からと見られるおよそ九〇〇人と推定される独身成人の

ホームレスがいる。Z C N Y は幾つにも分類されるホームレスのなかで、民間グループにも比較的容易に取り組み可能と思われる右の二つの種類のホームレス救済を、ヤンカース市という地域共同体の活性化のなかで果たそうと考えた。その中心機関となるのがグレイストン・ファミリー・イン (Greyston Family Inn、以下 G F I と略す) で、八六年の設立になる。Z C N Y とは別の非営利組織であるが、ホームレス・プロジェクトについては政府、州、市などの行政機関からの補助を見込んでいるので、政教分離の原則からこのような措置がとられたのである。ヘゼン・コミュニティといつた一般には決してよく知られていない名称をばかかつたからでもあろう。じつさいこうした手続きを経ることによつてプロジェクト自体の間口が拡がつたことは確かで、行政機関との連絡はとりやすくなり、また、いわゆるゼンに关心のある人

ばかりでなく、ホームレス問題になんらかの貢献をしようとしている一般の人々にも近づきやすくなつたと考えられる。

プロジェクトの当初の計画は、ベーカリーから至近にあるヤンカー市の廃校（元は小学校）の建物・敷地を譲りうけてGFIの本拠をおき、ここを母子および成人男子のホームレスの生活指導の場とし、ベーカリーではベーキングの職業指導を行おうというものだつた。けつきよく

このプロジェクトは積極的な協力者だつた現役市長アンジエロ・マルティネリが、八七年秋の市長選で落選するという思わぬ出来事のために頓挫してしまつた。プロジェクトにかかる人々からは、ヤンカース市長十余年の実績から当選は確実視されており、選挙に先だつ僅か数週間前、ニューヨーク市のクーパーズ・ユニオン公会堂でGFIの旗揚げを大々的にやつただけに結果は寝耳に水という感じだつた。新市長

は二八歳の法律家で、ホームレス対策には冷淡だといわれている。いつたい、アメリカでは国家の成立の経緯から言って、歴史的に「貧困は個人の問題」という考え方が強いが、彼は明らかにそうした声を代表しており、改めて一筋縄ではいかない問題の根深さを思い知らされた。ひとつの事実も視覚を変えれば見え方がちがう。

それはそれとして、GFIの初期のプロジェクトはおよそ次のようであつた。誰にでもわかるようにとの考えから、アメリカ人にはよく親しまれているフランク・バウムの童話「オットズの魔法使い」を借用してこのプロジェクトは「イエロー・ブリック・ロード」と名称された。一種の幸福追求物語だが、主人公たちが協力して艱難辛苦をのりこえていく過程で、自分たちがめいめい本来すばらしいものを持つていてこと気に気づいていくストーリーだ。禅でよく使われ

る「十牛図」に似ていなくもない。

母子ホームレスのばあい、小さな子供を連れているがために職業機会はおろか、一定の技術を習得する場まで奪われていることが多く、専従スタッフやボランティアの人々が子供の養・教育（地蔵ケアと呼ばれる）にあたる間、母親が職業訓練をうける。母子ホームレスのおよそ

の平均年齢が母親二四歳、子供六歳と言われることからもわかるように、右のような措置はどうしても必要な処方だといえる。また成人男子のホームレスについては収容者数が前者よりも少ないが、彼等のホームレスになつた原因が、アルコール依存・ドラッグ常用・怠惰などにあることが多いため、正しい生活態度の習得に力点がおかれる。また、収容者だけではなく地域住民にも施設の一部を開放し、カフエテリアの併設が考えられていた。さらに音楽・木工芸術・人形劇・写真・書道・文章訓練などが地域住民

の文化的向上のために予定されており、各分野の指導にはゼンに心をよせる人々があたることになつていた。ハプシコード奏者のアトニー・ニューマン、冒險家ジヤーナリストのピーター・マシスン、詩人のアレン・ギンズバーグといえば日本でも彼等の名を知る人は少なくあるまい。

けつきよく、ホームレスのための生活指導の場はしばらくお預けということになつたが、職業訓練の方はG.F.I発足前後から少しづつ始まつた。器具の名称、使い方から実際のベーキングの技術、製品の梱包、発送にいたるまでの、およそこの種の業務に関する一切のプロセスを段階を追つてすべて体験学習させようとするのである。ひと通りの過程を終えると本人の希望しだいで、そのまま従業員として働くことも、他のベーカリーで働くことも可能ということだつた。八九年には業務が拡大し、昼夜一交替制

カリグラフィ

をとるようになり、大半は黒人の若い男女で占められていた。

前の計画が頓挫した後もホームレス・プロジェクトは続行され、八八年にはベーカリーと一緒に存するかたちで新たに營利集団として建築と一般事務部門を設置した。ここでもそれぞれの職種のノウハウを訓練、習得することによって、各人が経済的に自立し、市民としての役割を果たすようになるべく期待されている。いずれもプロジェクトに加わりながら職業技術を学ぶといふもので、建築部門であればレンガ工・大工・配管・電気配線・設計等の訓練が含まれるし、事務部門では秘書・簿記・コンピューター操作などがその内容になる。生計には二つの部門が加わったことになるが、これは母体となるZCNYメンバーに帰属するものではない。ZCNYもひとつの機関として、これらの総合体をヘグレイストン・グループと彼等は呼んでいる。



ホームレスの家族を収容する施設

昨年（一九八九）九月には連邦政府の援助をうけて、ベーカリーからさほど遠くない場所に旧廃校に替わる建物を購入し、その改築には同グループの建築部門の人々があたっていた。これは成人ホームレスの職業訓練と就職の場である。

このプロジェクト全体は地域の他のキリスト教教会や民間の専門家、一般市民ならびに連邦、州、郡、市といった行政機関の支持によつて成り立つてゐるわけだが、これだけ広範囲の協力を得られるのは、これまで見てきたようにひとつにはプロジェクト自体のユニークさにあるといえよう。ホームレスといえばシエルター（一時救護所）、生活保護といった単純的な考え方になるべく避けられているようにおもう。

もつとも、ホームレスの職業から生活習慣、はては彼等の住む地域社会にまで目をむけようとするZCNYのソーシャル・アクションは、

見ようによつては画餅であるかもしない。まことに気の遠くなるような、息のながい多大の労苦を必要とする試みだからである。だが、問題の大きさと深さゆえほとんど頭をかかえている行政機関にとつては、小都市ヤンカースの宗教グループを中心とする大胆な試みが、解決をみるさいのひとつのケース・スタディと映つてゐることもたしかなようだ。行政側からの資金援助の増大のようすがその期待のありようを裏づけている。

V

以上がZCNYの掲げる「曼陀羅」の概略である。だが曼陀羅に「胎蔵界」と「金剛界」があるように、ZCNY曼陀羅の各要素にも、表裏の関係があるだろう。たとえば「^{ライブリーフッド}生計」には表の面として拡大・富裕、裏面にはみせびらかし・自己への耽溺がつねに僅かの距離できび

すを接している。同じように「^{スタディ}学習」には開放性・明晰性に対して知的虚偽・人の知見の独占、「坐禪」にはダイナミックな中心性・静寂に対して、無関心と放心、「超宗派」には慈愛・安寧に対しして愛着・とらわれ、「^{ソーシャル・クンショナル}社会福祉活動」には慈悲・友愛に対して画一化・全体主義など、何を列挙してもいいがいずれも言うところの方便である。要は彼等のそして、さらにいえばわれわれのひとりひとりがこれをどう捉えていくかにあるといつてよからう。

(一九九〇、五、十三)

バングラデイシユ仏教

三 宮 積 穂

イスラム教の世界

インド半島の北東部、ベンガル湾に面した位置にバングラデイシユ人民共和国がある。人口一億六一万人、総面積一四万平方キロメートル、国の主な産業としては米、ジユート、茶などを生産する第一次産業があげられる。

つい二〇年前までは、東パキスタンと呼ばれ、一九七一年現在のパキスタンから分離、独立しバングラデイシユ人民共和国ができた。

ダッカ国際空港に降り、そこからホテルに向う途中タクシーの中から初めて見るこの國の様

子には独自の雰囲気が漂っていた。街行く人達の姿は殆んどインド人と変わるものはないが、印度の騒々しさは感じられずどちらかと言えば、ひつそりと静まり返っているという感じだ。

道路の両側には、飲食店、茶屋、雑貨屋などが立ち並び、それなりの店構えをしているが少し路地の方に入ると小屋とも言えない程小さく汚い店の中に品物が並べて売られていた。又、これらの路地やちょっとした空地には路上生活者といわれる人達が住んでおり、彼らは棒で骨組みを建て、その上から布やビニールをかぶせた雨・露だけを防ぐといった小さな家に住み、

路上で火を燃やして食事を作り食べていた。そこに住む人々は、跣で服装も薄汚れていた。

インドカルカッタにも路上生活者は沢山いたが、彼らの表情を見ている限り、貧しくとも精一杯生きているという感じがした。そして何よりも彼らの顔に笑顔があつたがバングラディッシュの路上生活者には、それが感じられず、眉間に皺を寄せてその貧しさを必死に噛み締めていた。貧しさに必死に耐えているという印象を受けた。

夜街に出てみると、ランプの灯りの中に彼らの顔が映し出された。その顔にも眉間に皺がよっていた。

非常に貧しい国、私のバングラディッシュに対する第一印象である。

バングラディッシュの国の特色の一つとしてあげられるものに、政府がイスラム教的な国家を目指してその運営を行っているという点があ



バングラディッシュ首都ダッカ

る。かといって信仰の自由を否定しているわけでもなく、仏教、キリスト教、ヒンドゥ教などの宗教も存在する。しかし、その割合はやはり圧倒的にイスラム教徒が多く、全人口の九〇%がイスラム教を信仰しているという数字がでている。私が三日間滞在した首都ダッカでは、毎朝六時になると有線放送で街中にコーランが流されていた。又、街の広場などではマイクを片手にイスラムの教えを説いている布教師の姿が目についた。

イスラム教は、キリスト教、ユダヤ教などのようなセム的ー神教の伝統に属する宗教であり、又その教義もやはりキリスト教・ユダヤ教の影響を受けている。

六世紀の始め、アラビアの都市メッカで、マホメットによって説かれたのがその始まりであるコーランの中に「汝らの神は唯一なる神」、「並ぶものなき神」とくり返し強調されているよう

に、この宗教は、唯一アラーの神だけを信仰し決して偶像崇拜を認めない（イスラム教徒に言わせれば）絶対の一神教である。

マホメットを通して語られたアラーの神の言葉だけが真実であり、その神によつて示された法がすべてなのである。

私の受けた印象では、イスラム教の場合他のセム的ー神教に比べてその性質に柔軟性が感じられない。カチカチの鉄の塊のようなイメージが浮かんでくる。

これには、この宗教がアラビアという、言わば砂漠の中で発生したということに関係があるのではないかだろうか。（私の推測であるが）アラビア半島のように砂漠の多い厳しい風土の中では、当然食物もあまり育たずましてや日中は想像を絶するような暑さの中で、そこに住む人々はいつたいどのよだんな生活をしていたのである。

現在のよう文明が発達している時代ではない。

たぶん一日、一日をやつとの思いで過ごしていたことだろう。今日、食べる食物もなく腹を空かして食べ物を求めて歩きまわっている人もいたかもしれない。太陽が沈んで暑さが和らぐまでじっと木陰で堪えている人もいたことだろう。

果たしてこのような厳しい風土の土地に住む人々に例えばキリスト教のような右の頬を打たれたら左の頬をさし出せ的な精神が通用するだろうか。

アラビアには過去に、アブラハム教典に書かれているような「目には目を、歯には歯を」的な思想が存在している。少なくとも、この地にはキリスト的思想の教えは根付かないような気がする。砂漠に住む人々には、もつと強い有無をも言わせない神の教えが必要であつたはずである。そして彼らは、それをマホメットによつ

て説かれた。

唯一絶対の神、全知全能の神「アラー」に求めたのだろう、現に、コーランの中には「御心のままにある者を迷いの道に陥れ、また御心のままにあるものを正しき道に導き給ふ」というように、人間は、この神に依りすぎるより以外に救われる道のないことが説かれている。

アラーの神を信じることによつて生きる希望を与えられ、又、彼ら自身もそれをその神の上に求めたのだろう。いや、求めざるをえなかつたのかもしれない。

私がバンガラディシユで知り合つた一人のイスラム教徒が、「アラーの神が一息『フ』」と息を吹けば、この世界の全ての人々が死んでしまう。だけど、アラーの神を信じその教えを守つてゐる限りアラーは俺達を守つてくれる。そして、未来には一〇〇パーセントの幸福が待つてゐるんだ」といった言葉が今も忘れられない。

現在ではイスラム教徒は、イスラム的教義や

儀礼、イスラム的論議のみならず、イスラム的結婚や離婚、イスラム的相続等々、要するにトータルな形でのイスラム的な生き方や生活様式を行つてゐる。

バングラディシュにおいても、政府がイスラム的国家を目指している点で例外にもれず、それが受け入れられている。

このようなかで、彼らの国では異教徒と呼ばれる仏教、キリスト教、ヒンドゥ教を信仰している人達が、少なからずその影響を受けているのはいうまでもない。

日本山妙法寺、山主・藤井日達上人が生前バンガラディシユに平和祈願の仏舎利塔をつくるため、政府にその申請を申し出たが結局は許可がおりなかつたという。

なぜか？ 答えは簡単である。藤井日達上人が仏教僧であり、仏の教えに基づいて仏舎利塔

を建設しようとした為である。

私がお世話になつたダッカの寺院では、コーランが有線放送で流される時間は、寺内でマイクなどを使つて経を唱えることができず又、イスラム教の寺院が開放的に開かれているのに對してこの寺院は周りを高い塀で囲み外部からの侵入者を厳重にチェックするという感じを受けた。その中で僧侶達はひとつそりと信仰の火を灯していた。

バングラディシュ仏教の過去

現在、バングラディシユ仏教界は、二派に分かれている。

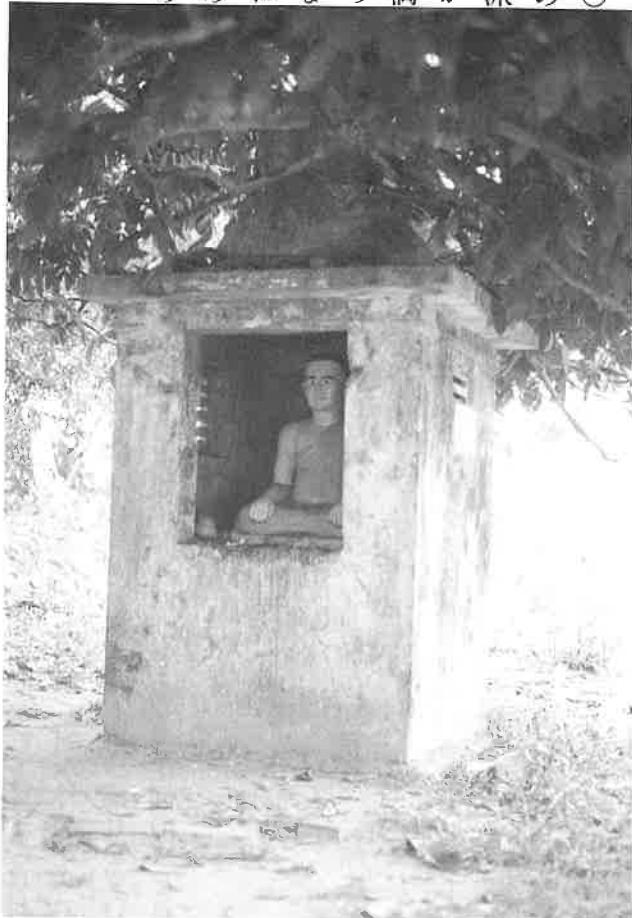
一つはサングラス派といわれ、それに対してもの派をマハテロ派といふ。どちらもタイ、ビルマ、スリランカ等と同じ南方上座部の仏教を実践し僧侶は二二七の戒律を守りながら生活をしている。その数はサングラス派僧侶一〇〇〇人、

寺院数二〇〇カ寺、マハテロ派僧侶五〇〇人、寺院数一〇〇カ寺といわれ、又、信徒の数いわゆる仏教徒の数は二派を合わせて五〇万人というからこの国の人口の一%にも満たない数である。（尚、僧侶の数、寺院数、並びに仏教徒などの数は正確な調査が行われておらず、これらの数字はあくまでも一応の目安としてあげておく。）これらの寺院、佛教徒は、殆どバングラデイシュの南東、ビルマとベンガル湾に挟まれたチッタゴン地方に集中している。

この国の佛教界が二派に分かれた直接の原因は、ビルマ僧・サングラス比丘の感化を受けた

僧侶達が、現在のマハテロ派から枝分れをしサングラス派という一派をつくったからであるが、実はそれまでに至る経過が複雑である。

今から約一〇〇年程前に、ビルマ僧サングラ



佛教寺院で見かけた仏像

ス比丘がバングラデイシュの寺院を訪れた。(当時は、国境などというのは名ばかりで、その近くに住む人々はわりと自由に往来ができたのだろう。バングラデイシュの隣りに陸続きでビルマがある)そこで彼が見た僧侶の生活は、彼の国で行われている南方上座部仏教の形態とはおよそ遠くかけ離れたものであつた。

当時のバングラデイシュの僧侶は、葬式等のいわゆる宗教的な儀礼は行つていたが、その生活の様子は信徒の人々と同じような服を着、日に二度の食事をとり、そして妻帯をして暮らしていた。(これらは、南方上座部仏教ではすべて戒律違反となる)つまりは、僧俗の区別がなく、全く信徒の人々と変わらぬ生活を送つていたのである。(この辺の感覚は、日本人にはわかりにくいと思う)ただ、自分達が僧侶だという印として肩から赤いタスキのようなものをかけていたらしい。

戒律を最も重要視する南方上座部の僧侶サングラス比丘が、その戒律を全く無視した生活を送つているバングラデイシュの僧侶達に対して激しい批判を浴びせたのはいうまでもない。彼は、僧侶達に二二七の具足戒を授け、三衣一鉢の生活をすることを勧めた。

我々日本人僧は、戒律に対してもその感覚が麻痺しているように思われるが、タイ、ビルマ、スリランカ等の南方上座部仏教の僧侶にとつては、戒律を守る生活が全てというくらいそれに對しては厳しさを持つている。

わずか一年間ではあつたが、タイ国で僧侶生活を経験させてもらった私には、サングラス比丘の行動は深く領けるところがある。ちなみに南方上座部仏教の僧侶が妻帯をすれば、パーラチク罪、最も重い戒を犯したことになり教団追放である。

この時に、サングラス比丘に従つて具足戒を

受けた僧侶達がサングラス派と名乗り、それに對して具足戒を受けることを拒んだ僧侶達はマハテロ派と名乗るようになつた。現在では、マハテロ派の僧侶達も二二七の具足戒を受け、三衣一鉢の生活を送つてゐる。しかし、それは過去の性格上嚴密なものとはいえないようである。

では、一体何故にバングラデイシユの僧侶達が妻帯をし、信徒の人々と同じ生活を送るようになったのか。ここにまさしく過去のイスラム教徒の仏教弾圧による仏教徒の悲劇が表されてゐるようと思う。

バングラデイシユに初めて仏教が伝わつたのは、五世紀頃、現在のインド・アッサム地方を経てだといわれてゐる。今でこそ、この国の殆どの人々がイスラム教徒であるが、それ以前少なうともイスラム軍がこの地方に進出してくるまでは平和な仏教国であつたのだろう。

それを示すようにバングラデイシユには、わりと広い範囲で各地に仏教遺跡が点在している。中でも、ダッカから北西約一八〇キロメートルの位置にあるラッシャヒ遺跡、ハープール遺跡は大きなもので、仏教大学の跡や一〇〇人の僧侶を収容できる庫裏の跡などが残されている。どちらも八世紀につくられたものである。

八世紀といえば、インドでは既に大乘仏教後期の頃であり、ナーランダ大学でも専ら大乗に関する講義などが行われていたというから、ここでもその影響を受けたことだろう。

そして、一二世紀の終り、アフガニスタンのバクティヤール・ハルジー率いるイスラム軍がインド・ビハール地方を攻略した際に多数の僧侶を殺害し、多くの寺院、仏像を破壊したようだ。その魔の手はバングラデイシユにも延びてきただのである。

現在、ラッシャヒ遺跡、ハープール遺跡等に祠

られていた仏像は、ダッカ国立博物館に保管されているが、それらの仏像は顔を削り取られ至るところを傷つけられていた。

この仏像を見る限り、「片手にコーラン、片手に剣」というイスラム軍のその性質を表す言葉通り、彼らのバングラデイシュ進出はやはり武力によるものであつた。何百人の僧侶、仏教徒達の血が流されたことは想像にかたくない。彼らは、自分達の身の安全を求めて必死に逃げ回つたことだろう。

バングラデイシュの首都ダッカには、現在三つの寺院があるが、これらは最近になつて建てられたものである。割と古い寺院は、チッタゴン地方の山の中にある、それも道なき道を歩いてやつとたどり着くといつたところに存在している。——今回、チッタゴン地方の寺院を三カ寺訪問したが、どの寺院に行く時もそこに着く

までは何回となく「この先に本当にお寺があるのか」という思いが起つた。——

又、これらの寺院には、一見してビルマ形式の釈迦像とわかる仏像が安置されている。

私が八日間にわたつて訪問した七つの寺院には、サングラス派、マハテロ派を問わず、全てビルマ形式の釈迦像が祠られていた。

実は、これが腑におちなかつた。不自然なものである。寺院の外観が古びているのに対しても、その釈迦だけがやけに新しい。又、サングラス派の寺院にビルマ形式の釈迦像が祠られているのなら話はわかるが、当時具足戒を受けることを拒んだマハテロ派の寺院にも同じようにビルマ形式の釈迦像が祠られている。

本来なら、マハテロ派の寺院に関しては昔からの仏像が祠られているのが自然である。これらの仏像が、バングラデイシュの寺院にもたらされたのは、ビルマ僧・サングラス比丘がこの

地に訪れてからであろうから、わずか百年程前である。

では、それ以前寺院に納められていた仏像はどこにいったのか。それとも、最初からこれらの寺院には仏像が安置されていなかつたのだろうか。

寺院の周り、あるいはその近くには、仏教徒だけの村があり、その構成は殆ど血縁関係で成り立っている。村の規模も十人から二十人という所もあれば三千人以上も住む大きな所もある。

壁を泥のようなものでつくり、その上に藁の屋根を乗せているという形式の家が多い。家中は二部屋ぐらいの小さな間取りで部屋の少し高い所に、仏の姿を象った仏画が安置されていた。この家に入った時も少し妙な感じがした。というのも、日本やタイなどの仏教徒の家の中には割派手な仏像などが祠られているがここに



寺院に参拝する仏教徒

はそれがなかつた。話を聞いてみると、この国の佛教徒は仏像を家の中に置くのを好まないという。

話を一番最初に戻そう。

この国では、元はインドから直接入つた佛教が行われていた。それは、現在残されている当時の佛教遺跡を見ても明らかである。当時そこでは、僧侶は戒律等を守り三衣一鉢の生活をしていたはずである。それがなぜ妻帯をし、信徒の人々と同じ生活をするようになつたのか。

これから先は、殆ど私の想像である。

現在バングラディシュには、八世紀につくられた佛教遺跡がインドとの国境近く、ラッシャヒとハプールとに残つてゐるが、これらの遺跡の囲りには佛教徒が住んでおらず、ここから南東へ約五〇〇キロメートル下つたビルマとベンガル湾に挟まれたチッタゴン地方に佛教徒は集中している。

イスラム軍がバングラディシュに進出してきた時点で、主な寺院は破壊され、そして大勢の僧侶、佛教徒の人達が殺されたことだろう。しかし、その難を逃れた人達もきっといたに違いない。

イスラム軍が進出してきたコースは、地理的関係からいつてやはりインドから徐々にその勢力を広めてきたはずである。となると、当然その難を逃れる為に佛教徒達はその場所から遠い所に逃げたことだろう。それが、現在のチッタゴン地方である。それも、人が住んでいるとも覚束ない深い山の中へと逃げたのである。

しかし、いつ何時みつかるかもしれない不安と怯えの為に、自分達が佛教徒である形跡を残すわけにはいかなかつた。その為には、寺院としての建物は建てても中には仏像を祠らず、又、信徒達の家の中にもそういう形跡を残すものは置かないようにしたのではないだろうか。(そ

れが今に至るまで行われている。)

そうなると、ビルマ僧サングラス比丘がこの地方を訪れた時、僧侶が信徒の人々と同じ生活を送っていたのも頷ける。僧侶達も自分達が仏教僧である形跡を消したのである。衣を脱ぎ捨て、戒をして、信徒達の生活に入つていったのではないか。

そして、ただ自分達が僧侶である証しとしてサンカティ（三衣のうちの一つで、南方上座部仏教では僧侶はこれを肩にかける。日本でいう僧伽梨衣）だけは形を変えて身につけた。これが肩からかけていた赤いタスキのようなものである。

以上、これはあくまでも私の推測である。

バングラデイシユ仏教の今

バングラデイシユでの南方上座部仏教

バングラデイシユ並びに、タイ、ビルマ、ス

リランカ等の国々では、現在南方上座部仏教が行われている。

南方上座部仏教とは、釈尊没後百年程後に教団規則の解釈などの違いから、保守的な上層の上座部と進歩的な大衆部とに根本分裂し、その後さらにいくつもの枝末分裂をした際にできた上座部系の一部派、分別上座部の教義が紀元前三世紀中頃にインドからスリランカに伝えられ、後に南方の国々、いわゆる前記の諸国にもたらされたものである。

バングラデイシユにおいては、それがわずか百年程前にビルマ僧、サングラス比丘によつて伝えられた。

この仏教は特色として、僧侶達の礼拝の対象は釈迦一仏である点、又、彼らはパリー語で書かれた三蔵を保持し、それらを学びながら二三七の戒律を守り乞食、托鉢の生活を送つている点などであろう。

その戒律とは、食事の作法から歩き方など日

常的規制から、不殺生、不偷盜、不妄語等の道

徳的規制までと幅が広い。

これらの仏教が行われている国では、在家信徒の青年男子は、二十歳を過ぎれば一度は出家しなければならないという風習がある。彼等は、一カ月乃至二カ月といった短い期間を寺院で僧侶として過ごすわけである。

私のお世話になつたタイ国パクナム寺ではパンサーの期間には（本来、僧侶は乞食、托鉢をしながらの遊行生活が基本であるが、雨の降る雨期の期間だけはそれが思うようにできない為、その間は、寺内に住み、パリー三藏、メディーション等の（日本でいう坐禪）修学を行う。この期間は、その年、その国によつて違うが、七月から十月までの約三カ月位である）これらの一時僧と呼ばれる一時的な出家者が多く、私はこの期間を約三百人余りの一時僧達と

一緒に生活を共にした。

その一日は、朝四時から夜八時までの勤行、パリー三藏等の講義、メディテーションと割とハードな日々が続く。彼等は、パンサーの期間が終ると還俗し、また元の生活に戻っていく。

この風習は、仏教徒の数の少ないバングラデイシュにおいてもやはり行われている。

そして、これらの国では出家者と在家信徒との区別が厳しそうにはつきりと分かれしており、例えば自分の子供が出家し僧侶になつたとすれば、そこには親と子という関係は存在せず、あくまでも僧侶と在家信徒という関係になつてしまふ。

パンサーの期間に、自分の子供に食事の供養に来た親が、先ず合掌、三挙し恭しくそれを差し出す姿を何度もみかけた。在家信徒にとつては、僧侶は戒律を保持し仏の教えを学び、実践している尊い存在なのである。

私がタイの東北部に行つた時なども、向こうから歩いてきた若者が私の姿を見るなり地べたに這いつくばつて三拜をしだしたのに驚いたことがある。

南方上座部仏教の国では、僧侶は厳しい戒律を保持し、それを実践し、又その仏教 자체が深く民衆の生活の中に入りこんでいる。

ではバングラデッシュにて僧侶達は具体的には一体どのような生活を送つてているのであろうか。

各国によつてその形態には相違があるが、こ

こでは今回私が訪問した僧侶達というよりは沙弥達（南方上座部仏教では、その戒律の中に未だ二十歳にならぬ者に具足戒を授けてはならないという戒がある。その為、二十歳に達していない者は見習僧として十戒だけを守りながら寺院生活を送る）の教育を行つてゐるバングラデイシュ比丘トレーニング＆メディテーションセ

ンターの一日を紹介しながら、バングラデイシユでの上座部仏教をみてみたいと思う。

十戒：不殺生、不偷盜、不邪婬、不妄語、不

飲酒、非常食よりの遠離、舞踊観劇よ

りの遠離、莊嚴の原因である塗香・服飾品などの遠離、高臥床・広臥床よりの遠離、金・銀受領よりの遠離

現在このセンターには、一人の僧侶と二十人の沙弥が生活しており、彼等はその一日を決まつたスケジュールに従つて過ごしている。それは次のようなものである。

午前

四時

起床

五時

掃除

六時半

勤行

七時～十時

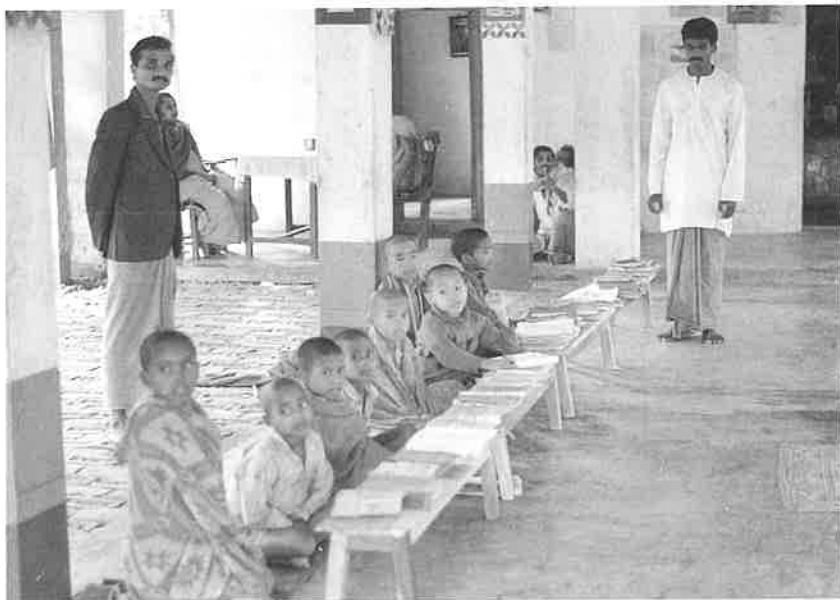
パリー三藏並一般学校教育

の授業



バングラディッシュ比丘トレーニング & メディテーションセンター

勉強中のサマネーン(小僧さん)



十時半 托鉢
十一時 食事

午後

十二時～一時 自由時間
一時～四時半 パリ―三蔵並一般学校教育の授業

四時半～七時半 自由時間

七時半～ メディテーション30分

八時半 勤行30分

八時半～十時 パリ―三蔵の授業

十時半 消灯

タイ国では、朝、手の平の甲がうつすらと見え始めた頃、僧侶は一斉に托鉢に出かけるが、ここではそれが十時半から行われている。では、朝の食事はどうしているのかといえば、

在家信徒の人達が自分達の家で作ってきた料理をこのセンターに運び供養している。

バングラデイシユでは、このパターン又は、

在家信徒が寺院に住み僧侶の食事を作っているというパターンが多い。

僧侶達は、あまり托鉢をしないらしい。食事が終った後、僧侶は在家信徒に五戒を授ける。

(不殺生、不偷盜、不邪婬、不妄語、不飲酒)僧侶達はそれらを守りながら一日の生活を送るのである。尚、僧侶並びに沙弥は戒律によつて午後からは水などの液体以外は一切を口にすることができない。

このセンターでは、一日八時間のパリ―三蔵および一般学校教育が行われており、沙弥達はこの時間に普通の学校教育を受け、そして南方上座部の教義、戒律等の勉強をしている。一般学校教育に関してはここに住む僧侶がそれを教えている。

しかし、その内容は充実したものとはいえないようである。このセンターでは、深く南方上座部の教義等を学びたいという意志のある沙弥

に対する対してはスリランカ、タイといった国へ送り出しそれらを学ばせているからである。

又、バングラディシュでは年に一度、PAIL SANSKRIT AND EDUCATION BOARD

主催の南方上座部仏教に関する総合的な（パリ一語、教義、戒律）試験があり、僧侶、沙弥は必ずこれを受けることが義務づけられている。その難度によつて、一級から九級までに試験内容が分かれており、一級から二級、三級へと順繰りに上へと上がつていくシステムである。

これには、僧侶、沙弥の区別なく、沙弥でも試験を合格さえすれば、上へ上へと上がつていくことができる。

僧侶の位は、この試験の何級を合格したかとすることと何回のパンサーを過ごしたかによつて決まる。

メディテーションに関しては、比丘トレーニング＆メディテーションセンターという名前と

は裏腹に三十分と意外と短い時間である。

話によると、四月に集中的にそれを行はるし。彼らの行うメディテーションとは、不淨觀並びに無常觀といわれるものである。

パリー教典の中に、鼻からは鼻汁が流れ、耳からは耳汁、口からは痰が吐きだされ肛門からは汚物が排出される。比丘はこの身が不淨であると観じつつ専ら修行に務めよ、さらに我々の命が終つた後、その体には蛆虫がわき鳥や獸によつて蝕まれ、そして最後には骨だけがそこに残る、比丘はこの身が無常であると観じつつ専ら修行に務めよといった内容のことが説かれてゐる。

つまりは、この身が不淨であり無常であると観することによつて自分自身に対する執着を断ち切れということだろう。

自分に対する執着がなくなれば、パリー經典の中に説かれている釈尊のいう苦の原因が全て

消え去ってしまう。

私の住んでいたパクナム寺のバングラデイシユ僧侶の部屋には必ず人の死体の写真が貼られていた。それも半分腐りかかつて腹の中の臓器がまる見る見えの写真である。

彼らは、その写真の死体を頭の中にイメージしながら不淨觀、無常觀といったメディテーションを実践している。

これらのメディテーションをこのセンターでは在家信徒の人達と一緒に行つており、又、メディテーション終了後の勤行にもやはり信徒達は参加し一緒に経を唱えている。

尚、お経は全てパリー語で唱えられている。

以上、バングラデイシユ比丘トレーニング＆メディテーションセンターの生活を通して、彼等の国での南方上座部仏教を簡単にではあるがみてみた。（私が見、そして聞いた範囲内で。）

その形態は少なくとも私が一年間僧侶生活を送ったタイ国のそれと若干の違いはあるにせよあまり変わらないようである。

ただ一つ気になつたのはサングラス派の寺院では戒律を厳しく守りメディテーション等を行い更に沙弥の教育にも力を入れているのに対して、マハテロ派の寺院ではその傾向が弱いという点であつた。ちなみに、ここで取り上げたバンガラデイシユ比丘トレーニング＆メディテーションセンターはサングラス派に属している。

子供達に教育を

今、バングラデイシユの僧侶達が熱心に行っている活動として、学校教育の運営が挙げられる。

バンガラデイシユにおいては、現在、義務教育の制度がなく、教育を受けたい者だけが学校に通うというシステムをとつてゐる。

私の聞いた話では、全人口の七十パーセントの人間は学校教育を受けていないという。貧しさの為子供を学校に通わせるよりは、働かせてお金を稼せがせた方がいいという考え方の親が多いようだ。その為、少なくとも仏教徒の子供達にだけはちゃんとした教育をということで、僧侶達は学校教育の運営に力を入れている。

又、もう一つの理由として、仏教徒の子供達が他の学校いわゆるイスラム教（これは政府の運営である）やキリスト教等の学校に通えば、そこを卒業する時期には彼らの宗教を信仰するようになってしまらし。そうなると、たゞでさえ数の少ない仏教徒が増え減つていってしまう。僧侶達にとつては、どうしても仏教徒の学校をつくる必要があったのである。——この国では異常な程宗教色が強いということを頭に入れておいてもらいたい。例えば、キリスト教の病院ではキリスト教徒しか働くことができ



仏教徒によって建設中の学校

ず、そこで他の宗教を信仰している者が働くこうとすれば、キリスト教に改宗しなければならない等など、これもイスラム共同体のその團結力の強さに対して他の宗教もそういう性質を持たざるを得なかつたのだろう。——しかし、その数はバングラデイシユの国の中に十五軒程しかなく、そこに通う子供達の数も全ての学校を入れてわずか二千三百人余りというから、五十万人の仏教徒の内四分の一の約十二万人が教育の必要な子供達としても仏教徒の学校が彼らを受け入れることのできる人数はわずか一パーセントにも満たない数である。

今回こゝでは、チッタゴンにある AGRA SARA Bouddha Anathalaya Temple^o 以下アグラサラ寺）での学校教育の状態を紹介したいと思う。

尚、この寺院はマハテロ派の総本山である。前回、マハテロ派の僧侶は戒律堅固の性格が

弱いと指摘したが、この派ではそれよりも社会福祉的な活動に力を入れている。

先ず、寺内には女子寮、男子寮、学校といったものが建てられており、現在男子生徒二百人、女子生徒五百人がこの寮に住み学校へと通っている。この数字を見てもわかるように、この寺院では女子を優先的に受け入れている。(ダッカ市内には全寮制の生徒数男子五百人という学校もある。)

殆んどの生徒は仏教徒の子供達である。

やはり、経済的に子供を学校に通わせる余裕のない家庭、又は両親とも亡くなつて孤児となつた子供を預かり学校教育を行つてゐる。そこには三十人の先生が雇われ生徒達に教育をしてゐる。

日本でいう小学校教育が五年間、中学・高校教育が五年間、そして希望によつてはチッタゴン市内にあるチッタゴン大学などにも進むこと

ができる。又、この寺内には、女子生徒だけを対象にした四年制の短期大学的な性質の学校がある。毎年、何人かの女子生徒は中学、高校教育が終るとこの学校へと進んでいる。

これらの学校、寮の維持費、生徒達の生活費、先生に支払われる給料等は、全てアメリカ、ノルウェーなど海外からの援助金で賄われている。ちなみに、我国からは全日本仏教連合、立正佼成会から援助がなされている。

寮も学校も、海外からの援助金で建てられたものである。土地だけは寺の所有であるらしい。

バングラデイシユ政府からはわずかに七十人分

の子供達の分しか援助がなされておらず、現在も各国からの援助は続けられている。つまり、寺院 자체ではこれらの活動をする機能は一切もちあわせておらず、あくまでも他国からの援助金があつて初めて学校等の運営がなされるという状態である。

これは、キリスト教などの学校の場合にも同じことがいえる。彼等の場合は、その運営資金は殆んど同じキリスト教国から送られている。

これも、国全体が貧しい為、自分達の力だけでは思うように活動できず、どうしても他国からの援助を受けざるを得ないらしい。

私がこのアグラサラ寺を訪れた時、ちょうど学校は試験が終わって長期の休みに入つており、生徒の大半は親元へと帰つていたがそれでも百人ぐらいの子供達は残つていた。

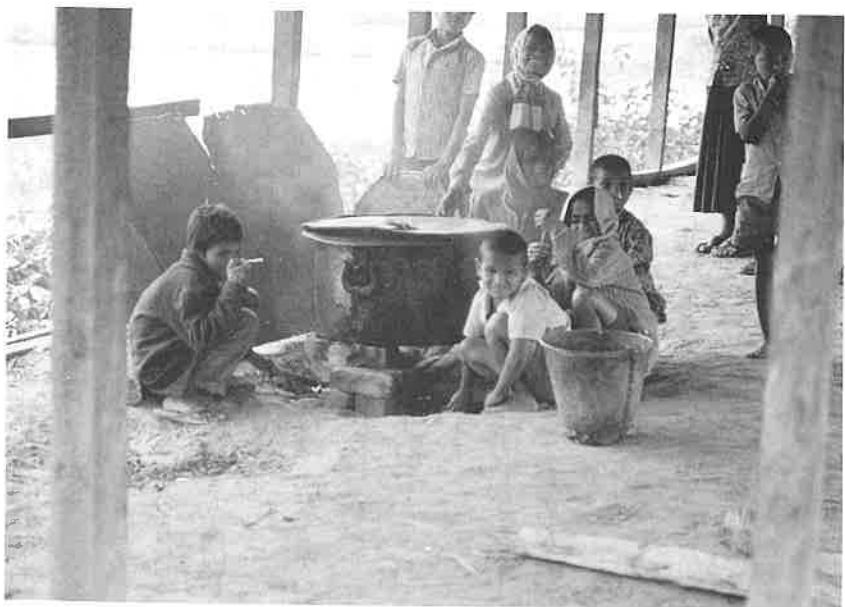
この子供達に「なんで家へ帰らないのか」と聞いてみると、「家に帰るよりはここに居た方がいい」という答えが返ってきた。

この子供達にとつては、家よりもここで的生活の方が快適らしい。少なくとも、ここに居れば三度の食事を食べられ、ベットに寝られることは確かである。

しかし、その食事も御飯と少しばかりのおか



生徒の様子



ず（私が彼等の部屋へ入つていった時には御飯におかず代わりとしてピーナツを食べていた）

と十分なものとはいえず、又、十二月の寒い気候の中、子供達はシャツ一枚に半ズボン、そして跣という姿で寒さに震えていた。学校や寮の施設等は、一応の完備がされているが子供達の生活面に関してはまだ十分な配慮がなされていないようである。

夕方、寺内にある池の辺をアグラサラ寺の総務総長、スガタナンダ比丘と二人で散歩してい

ると、パリー語で唱えられたお経の声が聞こえてきた。彼は、女子寮に住む女の子達が唱えていると教えてくれた。やさしい響きのお経だ。

スガタナンダ比丘は、お経の声が聞こえてくる方をじっと見据えながらポツリとこんな言葉を呟いた。

「私達もこうして仏教を広めようと必死に努力しているんです」と。

この一言に、バングラデイシユ仏教の現在の状況が全て現されているように感じられた。

この国では、仏教が我々日本やタイ、スリランカ、ビルマ等の国々のように、ある程度の位置、又は国教的存在にあるのではない。あくまでも、イスラム教に対する異教徒の教えなのである。そこでは、僧侶達の努力なしにはその教えが衰退していくことは火を見るより明らかであろう。

バングラデイシユ仏教の問題点

バングラデイシユ仏教界の抱えている問題点を、私が第三者的立場で見た範囲内で次に挙げてみたいと思う。

1 バングラデイシユの国自体が、イスラム教的国家を目指している為、何らかの形で異教徒と呼ばれる仏教徒は、その行動に規制を受けている。

2 仏教徒の数が少なく、又、沙弥達を育成する十分な機関がない。

3 寺院で活発な学校教育、孤児等の社会福祉的活動を行いたくとも、その運営資金が思うようにならない。

4 現在、バングラデイシユ仏教界はサングラス派、マハテロ派の二派に分かれている

が、両派とも互いに嫌悪し合い交流がなされていない。

1に關しては、政府の上層部がすべてイスラム教徒という上に（他宗教を信仰している者は絶対に国のトップの地位には就くことができないという）彼等から国民に至るまでその團結力が強いというこの国の中では、他宗教を信仰している者は日本流にいえば肩身の狭い思いをしている。

しかし、少なくとも信仰の自由は認められ、

日常生活的レベルではそれはあまり表面上には

現われていないようであるから、現在の所他宗教の人達はその範囲内で活動するしかないであろう。この国の上層部の人間がもつと寛容にイスラム教以外の宗教を受け入れる方針を取る以外にこの問題が解決される術はないと思われる。

2については、これから先の見通しは明るい。沙弥達を育成する十分な機関がないというのは南方上座部の教義をしつかりと教えることのできる僧侶がないということである。

しかし、現在私の知っている限りでも数十名の沙弥達がタイ国にパリー語、戒律等の強学に来ており、二十年、三十年後には彼等がバングラデイシユに帰りしつかりとその法を伝えることになるであろう。

又、仏教徒の数も年々わずかではあるが増えてきている。

僧侶が行っている学校教育、孤児院の運営に

関しては、その機能は完全とはいえない。彼等にしてみれば、大勢の子供達を預り（仏教徒の子供を中心に）十分な学校教育を施したいのであるが、アグラサラ寺での運営資金がすべて海外からの援助で賄われているという状態をみてもわかるように、その運営資金が思うようにならないのである。

尚、これらの援助が行われているのは、マハテロ派寺院に関してだけであつて、サングラス派では子供達の生活費等はすべて寺院で負担している。その為、生徒の数も二十人乃至三十人と少ない数である。

日本やタイ国であるならば、僧侶は信徒の方々の喜捨を元に寺院活動並びに社会福祉的活動を行うことができるのであろうが、バンガラディシユにおいては国全体が貧しく、国民の生活レベルが低い為、信徒の人達は寺院に御参りこそすれ、とても喜捨ができる程の余裕はない。

自分達の生活を維持していくだけで精一杯なのである。

従つて、僧侶が活発な学校教育等の運営を行いたくともその運営資金が思うようにならないというのも頷ける所がある。

少なくとも、この国が豊かになり、国民の生活レベルが高くなるまでは、これからは両派共に（なぜマハテロ派だけに海外からの援助がなされているかは次で述べる）海外からの援助が必要であろう。そして、より多くの子供達に教育を施す必要性が感じられる。

彼らの学校を卒業した子供達の中からバンガラディシユの国の未来を考え、この國の發展に貢献できる人間がでてくることをただ願うばかりである。

サングラス派、マハテロ派とバンガラディシユ仏教界が二派に分裂し、その交流がなされていないという原因は、これらの派が二派に分か

れたことに、所以している。

そして現在は、サングラス派にいわせれば「マハテロ派では戒律をしつかり守っていない」といい、マハテロ派では「サングラス派の僧侶は食つて寝るだけ」と所謂、戒律だけを重視し自分達の派のような社会福祉的活動をあまり行つていない（小規模ではあるがサングラス派でも学校教育、孤児院等を運営している）と言い合つてゐる状態である。

海外からの援助は、マハテロ派寺院に限られているというのも、これらの援助機関を悪く言えばこの派が独占しているからである。当然これららの内情を外国人は知らない。

この問題は、第三者的立場から見れば、早急に解決すべき問題である。というのも、異常な程宗教色が濃く、さらに輪をかけてイスラム共同体の団結力が強いこの国の中で、数の少ない仏教徒がその内部で分裂していたのでは話しに

ならない。

どちらも、釈尊の法を受け継ぐ者同士という高い視野から理解し合わなければ、正しく自滅してしまう可能性がある。

これらが、私が見た範囲内ではバングラディシュ仏教界が抱えている問題のように思われた。

今日、明日には解決できない問題もあるが、少なくとも先ず解決できそうな点から徐々にそれがなされるべきであり、またその為には少なからず海外からの援助、協力、そして助言が必要であろう。

これは、同じ仏教徒として我々に与えられた課題でもあるように思う。

TASSAJARA ZEN

MOUNTAIN CENTER 冬安居

沖田玉映

サンフランシスコから南へ百マイル下ったカーメル市からもう一、四十マイル東の山奥にタサハラがある。そこには TASSAJARA (タサハラ) ZEN MOUNTAIN CENTER が所在している。(以下 タサハラと略す。) タサハラは古くから、温泉の避暑地として知られている。

一千年前に、ローカルのインディアンが最初に温泉を発見し、一八四三年頃に狩人のハンターによつて世間に知られるようになる。幾山を越えて行く故、昔は幌馬車に昔物を乗せてタサ

ハラへ避暑に赴く写真が残されている。現在も補修し使用している石造部屋は、百十年前に建てられている。

昭和四十六年に遷化された鈴木俊隆老師（曹洞宗）が米国に渡り、特にサンフランシスコを中心には布教され、サンフランシスコ禪センターを設立される。現在は鈴木老師の孫弟子にあたる天真アンダーソン師によつて受け継がれている。サンフランシスコ禪センターは市内と市内から十五マイル離れた所に、GREEN GULCH

FARM とそしてタサハラの二ヶ所、その他、米国内の各所に於いてグループ活動をしている。

こここのタサハラに最初に訪れたのは、カルフアルニアの曹洞宗合同攝心会が昨年五月にタサハラに於いて行なわれた時、その折、七十歳過ぎた禪僧（女性）にお逢いし、その高齢にもかかわらず、堂々かくしやくたる導師される姿に感銘を受けて、今度は是非、ご一緒に安居（修行）をしたいと思い、さつそく前角老師に意考を相談したところ、他の所を見ることも勉強になるだろうとおっしゃり喜んで、手続をとつてくださる。

ハラは米国で最初に豆腐料理を拵め、今は温泉と豆腐料理の人気を高め、いつも予約が一杯とのこと。オフシーズンの秋と冬に年二回、九旬（九十日）安居（坐禪修行）を行なう。その時は、修行者以外の立入を禁止している。小尼は一番嚴寒の一月九日からの冬安居に、参加するご縁に恵まれる。

車でタサハラに着くと、まずダルマ（仏の教え）ゲートと呼ぶ日本風の屋根の付いた門が最初に目につく。タサハラの大きな建物を紹介すると、一番大きな木造建築の僧堂は、ほぼ日本の僧堂形式になつていて。僧堂の横に流れる川を隔てた所に小篋に囲まれた茶室建築の開山堂、石造りのどつしりとした典座寮（台所）、そして二階建てのダイニングルーム、一階はミーティングやゲスト用の食堂、二階は八ヶの客室になつていて。少し離れた所の小川の辺に、少し入母屋造りに似た和風建築の天然温泉の浴室ハラクッキングと固有名詞の如く呼ばれ、タサ

とサウナ。その回りに、コティジ風のキャビン（客屋）が約四十近く点在する。小尼はダイニングルームの二階の一番奥の、川の流れる音の聞こえる、ベットと小さな整理タンス、ランプ二個を設置してある三畳ぐらいの広さの、質素ながら落ち着いた部屋を貸して頂く。

今回の参加者は、米国以外からはメキシコ、ベネゼエラ、イギリス、ドイツ、フランス、ポーランド、ボルゲリア、中国と世代も、二十代から七十代と幅広く、全員約六十人程（その中、出家者は十人程）。

本格的、修行期間に入る前に旦過寮（修行の準備期間）を行なう。前回、安宿した者は一日、それ以外の者は、全員、経行（休憩）なしの朝から夜まで五日間、坐禅をこなさなければ、この安居に参加出来ない規則になつていて。坐わり馴れない一般の参加者は、大変な五日間であつたろうと察する。全員、無事旦過寮を終えた

時には、お互に同じ難関を通つて来たという気持ちが通じ合つてか、自然と一つの和合となり、これから約九十日間の修行生活が始まる。

一日のスケジュールは朝、振鈴（起床）四時、暁天坐禪二炷、四時二十分から、そして朝課、粥座、スタディー、小休憩、清掃、閑中坐禪またはレクチャード（提唱、話し合い）、斎座（昼食）、休憩、一時より作務、開浴（入浴）、晩課（勤行）次いで、薬石（夕食）、小休憩、スタディー、夜坐（坐禪）二炷、開枕（就寝）九時と大体、以上内容により行なう。

タサハラは山の山奥の為、自家発電により電気の使用は最小限にしている。晨朝、振鈴の音に眼をさめし、眠り足りない体をおこして、僧堂へ急げば外はまだ満天の星空、外気の澄んでいるせいか、よけいに肌に冷めたく感じる。参道のランプの点々とした明りが揺れ動き、その中、僧堂集合の合図の木板の音がゆっくりと響

き渡る。ランプの温かい炎に「仏が速く、僧堂へ赴けよ」とおっしゃっている如く仏の慈愛を思われる。数日ならばランプ生活もロマンチックになるけれど、日常茶飯事となると大変である。晨朝、皆なが僧堂に集まる前に、僧堂と参道のランプ内外約六十個のランプに明りをともす当番を何回か勤める。丁度当番の時、めったに雨の降らないタサハラなのに、どしやぶりの多雨の中、外は暗く懷中電燈を手に持ち、首にマッチの入った箱をぶらさげて、点け歩く。多雨の為マッチが点かず、ライターに替えて、すぐに炎が消えてしまい四苦八苦したことを、今となっては懐かしく思い出す。なに一つ取つても修行と感じる。スイッチを押せば、明るくなることを当たり前に馴れている小尼には好い経験をする。

食事は三度、僧堂行鉢（正式な作法）により大擂（鳴し物）を用いて行なう。皆な器用に作

法どうり、応量器や箸を扱っている。もちろん全て精進料理のベジタリーにより、朝はお粥の代用として十種類のオートミール、ごま塩が一緒に毎日、替りながら出てくる。斎座（昼食）のおもしろいメニューの中に、豆腐シチュー、味噌と醤油の味付け風、何々美味しい、デリシャス！ 薬石（夕食）はグリーン野菜のおひたしと朝と昼の残り物をミックスした和風おじやといったところ、栄養のバランスもとれて、上品に味付けしている。

大凡、典座寮（台所）で温かい味噌汁を作つても、僧堂で頂く時には、どうしても、ぬるくなってしまう。しかしここのタサハラは僧堂で坐っている修行者達が応量器を開いてから、汁物は汁什（深鍋）に移す、そこまで心遣いに徹している。

斎座（昼食）を済ませ、休憩時間を一時間程すると、ガラン、ガランと山の谷間の静寂を破

つて響き渡り、田舎の教会の鐘の音に、似ている。これは作務開始の合図の鐘の音、作務は午後一時から約三時間程、行なう。いつも感心することは、彼らは家や何んでも、自分達の手で作つてしまふことと、女性もたくましく、肉体労働も殆ど男性と同じように力強く一緒に働いている。小尼も皆なと一緒に作務を行ない、斧を振り上げるだけでも重いのに、それを用いて丸太割りの初めての経験をする。又、逆に男性も典座（台所）寮、裁縫の作務をしている。

一日のスケジュールの中にスタディという看護の時間（仏教関係の読書時間）がある。米国のどこの MONASTERY（禅道場）にスタディーの時間、話し合いや質疑応答の多いことが特徴に思う。ここに参加している人は高学歴の人が多く、又、熱心に仏教や東洋哲学を勉強している。我々の ZEN の修行は、文字を追うことよりも、むしろ実践し、この身で体得することを



重んじることも充分、彼らは知っている。しかしどうしても最初に頭の中で理解してからでないと行動に移せない。理路整然としないと納得出来ない。これは文化の違いからと思う。

今回の参加者の中に、二十代から五十代の人々が長期間の修行に参加している。一番働き盛りの人が仕事はどうするのかと思えば、こちらは終身雇用制度と違う。今、一番何をするべきか、しっかりと人生を考えたいと思うと、仕事を辞職して参加し、又、再就職する。又、六十歳過ぎて退職した人も真剣に仏道を求めて参加し、若い人と一緒に修行することは、さぞ大変であろうと察するけれど、けして自分を甘やかさず、配役も平等に勤め立派に果たしている。一つの集団生活の中で、特別に目上の人を持ちあげたり、若い人を青二歳的に扱かわざ、お互に尊重し、一対一のフレンドリ的な対等な付き合い方である。各自がしっかりと自分の意見を

持つて、堂々と意見を述べあう。小尼が時々戸惑うのは、個人主義の違いにびっくりさせられる。

ある時、洗面所に「BODHISATTVA SLEEPING」と書かれたカードを見つけ、「菩薩が寝ている」とは如何なる意味か、少々考えてしまい、あつそうか菩薩になる。つまり仏なる心が眠っている、もつと水やトイレットペーパー等を大切に使うようにとの注意、何々洒落たことを書いていると感心したけれど、後に、昼寝をしているから、静かにしてほしいと知る。一度、入口に立ち、話しかけていたら、ここのかードが見えないのか、静かにしてほしいと言う。修行中に昼寝をしている人の主張が通るから、おもしろい。

日本人の思っている個人主義とは、少々違うよう思う、何か個人主義というと自分勝手な、自己中心的な考え方を個人主義と見方をしている

ように思う。

例えばこちらの親切とは、何から今までの至れり尽くせりの親切の仕方よりも、自分から困ったことや、わからないことを質問したり、聞いたりすると、嫌な顔をせずに、応対してくれることを何度も繰返し聞いても、親切に教えてくださる。しかし、こちらが困ついても、自分から言うまでは、そのままとなつていて。そして自分で出来ることは、何でも人に頼らず、自分ですることが、前提となつていて。

国が違えば自ずと習慣の變つて来るのは、当たり前のこと、今回の安居に於いて、また一層色々な事を、特に個人主義について学ぶ機会を得る。タサハラの天眞先生始め、多くのメンバーの方々に本当に親切にして頂いたことは忘れられない。又、小尼は、何処へ行つても親切にして頂く、これも、偏に前角老師様や黒田老師様の

余徳のお陰と感謝している。

本当に日米、多くの方々による、ご支援、ご法愛を頂き、アメリカ禪を学ぶことが出来る幸に感謝している。

紙上を借りて、厚く心より御礼を申し上げます。

合掌

Seven years have past since Zenkoji scholarship for studying abroad started. We sent many priests to foreign countries, and the number of priests reached 34. The countries they've proceeded are India, Sri Lanka, Thailand, Korea, the United States, Britain and France. We also received priests from 9 countries, Europe, Korea, and China.

The first volume of essays we published this time is the manuscripts by priests to apply for our scholarship. Other occasions, Zenkoji bulletin "Seiju" has run reports by priests studying in foreign countries, or after returning to Japan. This extra number of Seiju is of four essays, the contents are "Report as a guest professor for 3 months at Sri Lanka national Kelanya Pari Buddhist graduate school" by the sixth delegation Rev. Sodo Mori (professor Aichi Gakuen university), "Note about American Zen-Buddhism, Activity and view of ZCNY" by the second delegation Rev. Yoshitaka Shimazaki (professor of Hanazono University), "Report about Buddhism in Bangladesh" by the sixth delegation Rev. Mutsuho Sannomiya, and "Experience at Tasahara Zen Mount Center" by the sixth and seventh delegation Rev. Gyokuei Okita (stay in the USA). All of them are

valuable materials about Buddhism, especially Zen-Buddhism in Sri Lanka and the United States.

We hope you to read them and to look toward to internaionalize Zen-Buddhism.





成寿 特別号
平成三年十一月二十日発行
発行所 成寿山善光寺
印刷所 横浜市港南区日野町一六〇四
電話 ○四五（八四五）一三七一
神奈川新聞社出版局





極淨善光寺